

「あの日」と、「明日」のあいだ。

3.11から15年、600人の大人が語る「本当のこと」。



開智所沢中等教育学校
社会科教諭 藤澤和峻



「あの日」
3.11

生きる意味 の再構築の視点から



Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



PROFILE

藤澤和駿

KAZUTAKA FUJISAWA



学位 教職修士 / Master of Education (Professional)

研究 社会科教育研究

防災教育研究

キャリア教育研究

米国キャリア教育研究

免許 中学校教諭専修免許状

高等学校教諭専修免許状

高等学校教諭専修免許状

来歴 東京都公立中学校

広告代理店

開智所沢中等教育学校

担当 社会科（教科）

探究部（分掌）

特進探究クラス（2年8組）

社会

地理歴史

公民

専任教諭

Legal Ops / BizDev

専任教諭※現在

主任

副主任 / P.P.C.

Personal Project Coordinator

担任

受賞歴

2021年 第70回 読売教育賞「優秀賞」(読売新聞社)

令和4年度 東京都教育委員会職員表彰「立志賞」(東京都教育委員会)

令和4年度 教育研究助成事業教育実践論文「優良賞」(公財 日本教育公務員弘済会)

哲学

社会を変える、社会科を。

深さ志向の授業を構想できることが強み。

資質・能力ベースの授業は「少なく教えて豊かに学ぶ」が鍵。

知識ではなく、生きる知恵を獲得できる時間をつくっています！

Less is More



社会知盤
SHAKAICHIBAN

PROFILE

藤澤和駿

KAZUTAKA FUJISAWA



学位 教職修士 / Master of Education (Professional)

研究 社会科教育研究

防災教育研究

キャリア教育研究

米国キャリア教育研究

免許 中学校教諭専修免許状

高等学校教諭専修免許状

高等学校教諭専修免許状

来歴 東京都公立中学校

広告代理店

開智所沢中等教育学校

担当 社会科（教科）

探究部（分掌）

特進探究クラス（2年8組）

社会

地理歴史

公民

専任教諭

Legal Ops / BizDev

専任教諭※現在

主任

副主任 / P.P.C.
Personal Project Coordinator

担任

受賞歴 2021年 第70回 読売教育賞「優秀賞」(読売新聞社)

令和4年度 東京都教育委員会職員表彰「立志賞」(東京都教育委員会)

令和4年度 教育研究助成事業教育実践論文「優良賞」(公財 日本教育公務員弘済会)

哲学

社会を変える、社会科を。

深さ志向の授業を構想できることが強み。

資質・能力ベースの授業は「少なく教えて豊かに学ぶ」が鍵。

知識ではなく、生きる知恵を獲得できる時間をつくっています！

Less is More



社会知盤
SHAKAICHIBAN

PROFILE

藤澤和駿

KAZUTAKA FUJISAWA



学位 教職修士 / Master of Education (Professional)

研究 社会科教育研究

防災教育研究

キャリア教育研究

米国キャリア教育研究

免許 中学校教諭専修免許状

高等学校教諭専修免許状

高等学校教諭専修免許状

来歴 東京都公立中学校

広告代理店

開智所沢中等教育学校

担当 社会科（教科）

探究部（分掌）

特進探究クラス（2年8組）

社会

地理歴史

公民

専任教諭

Legal Ops / BizDev

専任教諭※現在

主任

副主任 / P.P.C.

Personal Project Coordinator

担任

受賞歴

2021年 第70回 読売教育賞「優秀賞」(読売新聞社)

令和4年度 東京都教育委員会職員表彰「立志賞」(東京都教育委員会)

令和4年度 教育研究助成事業教育実践論文「優良賞」(公財 日本教育公務員弘済会)

哲学

社会を変える、社会科を。

深さ志向の授業を構想できることが強み。

資質・能力ベースの授業は「少なく教えて豊かに学ぶ」が鍵。

知識ではなく、生きる知恵を獲得できる時間をつくっています！

Less is More



PROFILE

開智所沢中等教育学校

KAICHI TOKOROZAWA SECONDARY SCHOOL

駆け出し、3年目。



PROFILE

開智所沢中等教育学校

KAICHI TOKOROZAWA SECONDARY SCHOOL



挑戦する6年間

挑戦する6年間	1年(中1)		2年(中2)		3年(中3)		4年(高1)		5年(高2)		6年(高3)	
	中1・中2・中3の学習内容				高1・高2の学習内容				高3の学習内容、大学進学対策			
クラス編成	[1クラス30名程度] 特進コース 医進・国際・探究 本科コース 医進・国際・探究				[1クラス30名程度] 2年(中2)までの習熟度で再編成 内部進学生と合流 特進コース 医進・国際・探究 本科コース 医進・国際・探究				国公立大コース 理系/文系 私立大コース 理系/文系 医系大コース 医系 特別国際コース 国際系		国内の大学を目指す 海外の大学を目指す	
学びの特色	● 基盤となる知識・スキルの体系を習得する ● 探究的なプロセスを授業の内外で取り入れることで、創造力、探究力、協働力、発信力を伸ばす ● 自分に必要な学びを考え、効率的に学ぶ力(戦略的学習力)を育成する								● 日本の一般選抜で通用する学力・思考力を磨く ● 総合型選抜や、海外大学で通用する探究力・発信力を磨く			
個人探究	テーマを自分で決める探究				専門 探究 【他地域 FW】		個人専門探究(プロジェクト型) 【首都圏 FW】		英語によるプレゼンテーション 【海外 FW】		個人研究、 総合型選抜に向けた研究 (希望制)	
学年の探究分野 【フィールドワーク(FW)】	自然科学系探究 【礎 FW】		人文・社会・経済系探究 【社会 FW】									
キャリア・進路学習	過去の成長を振り返り、 10年後の未来を描く		30年後の未来を 見据えて、夢を育てる		社会を知り、 生き方を考える		職業を知り、 考える		夢をかなえるための、 ベストな進路を選択する		大学進学に必要な 受験勉強について考える 学校一体でラストサポート 夢をかなえる	

PROFILE

開智所沢中等教育学校

KAICHI TOKOROZAWA SECONDARY SCHOOL



Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



1

経験なき世代が中心の社会への移行

2

「死」への恐怖が中心の防災教育

1

経験なき世代が中心の社会への移行

2

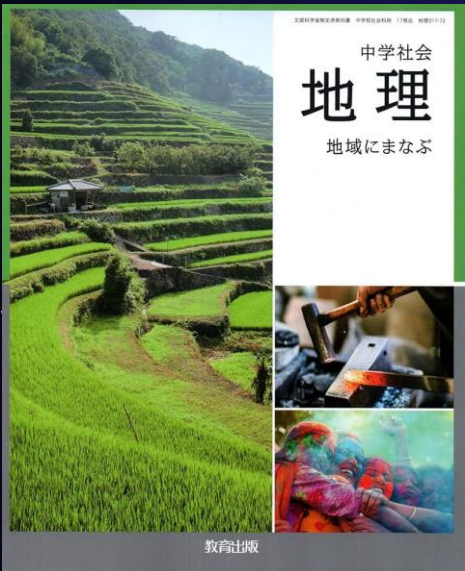
「死」への恐怖が中心の防災教育

東日本大震災から、15年。

現在の中学 1 年生 =

現在の中学 1 年生 = 「経験なき世代」

Buffer



● 人的被害

死者	19,765名
行方不明者	2,553名
負傷者	6,242名

● 建物被害

全壊	122,039棟
半壊	283,698棟
一部破損	750,020棟

● 避難者支援の状況

全国の避難者	29,328名
--------	---------

[2023年3月1日現在]
(消防庁災害対策本部)

[2024年2月1日現在] (復興庁)

東日本大震災の発生

2011年3月11日に三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の激しい地震が日本を襲いました。宮城県栗原市で震度7の揺れが観測され、宮城県、福島県、茨城県などで震度6強を記録しました。この東日本大震災は、東北地方の各地に非常に大きな被害をもたらしました。震災による死者・行方不明者は2万2000人以上であり、特に地震により発生した巨大津波により、多くの人が犠牲になりました。また、建築物の全壊・半壊や原子力発電所事故により、現在でも多数の避難者が全国で生活しています(資料③)。交通網やライフラインも大きな打撃を受け、停電や断水などは、国民生活や産業に大きな影響を及ぼしました。一方、被災地から遠く離れた東京でも、東北地方の多くの発電所が被害を受けたため、電力供給能力の不足が深刻なものとなりました。大規模な停電を回避するための計画停電が実施され、生活や企業の活動などにも大きな影響が及びました。さらにそれ以降、夏・冬の電力需要が高まる時期には、電力不足のため節電がよびかけられるようになりました。

Buffer



● 人的被害

死者	19,765名
行方不明者	2,553名
負傷者	6,242名

● 建物被害

全壊	122,039棟
半壊	283,698棟
一部破損	750,020棟

[2023年3月1日現在]
(消防庁災害対策本部)

● 避難者支援の状況

全国の避難者	29,328名
--------	---------

[2024年2月1日現在] (復興庁)

東日本大震災の発生

2011年3月11日に三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の激しい地震が日本を襲いました。宮城県栗原市で震度7の揺れが観測され、宮城県、福島県、茨城県などで震度6強を記録しました。この東日本大震災は、東北地方の各地に非常に大きな被害をもたらしました。震災による死者・行方不明者は2万2000人以上であり、特に地震により発生した巨大津波により、多くの人が犠牲になりました。また、建築物の全壊・半壊や原子力発電所事故により、現在でも多数の避難者が全国で生活しています(資料③)。交通網やライフラインも大きな打撃を受け、停電や断水などは、国民生活や産業に大きな影響を及ぼしました。一方、被災地から遠く離れた東京でも、東北地方の多くの発電所が被害を受けたため、電力供給能力の不足が深刻なものとなりました。大規模な停電を回避するための計画停電が実施され、生活や企業の活動などにも大きな影響が及びました。さらにそれ以降、夏・冬の電力需要が高まる時期には、電力不足のため節電がよびかけられるようになりました。

現在の中学1年生 = 「経験なき世代」

巨大な統計データ (歴史上の記号)

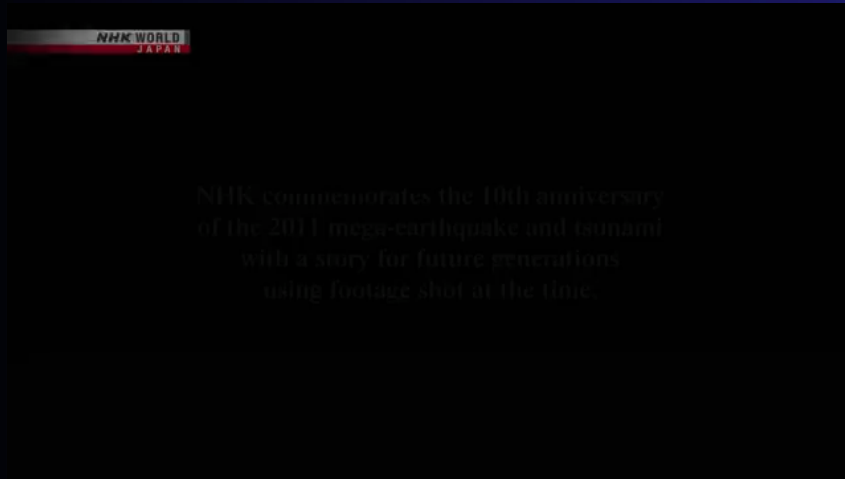
現在の中学 1 年生 = 「経験なき世代」

1

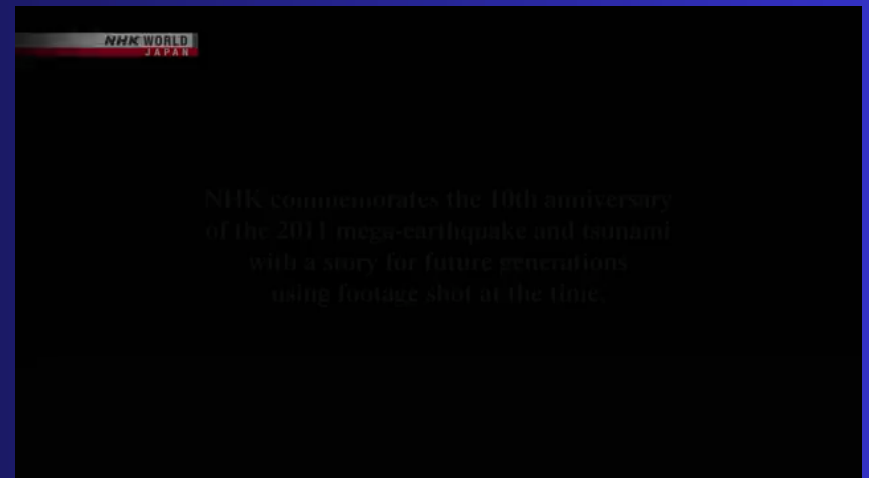
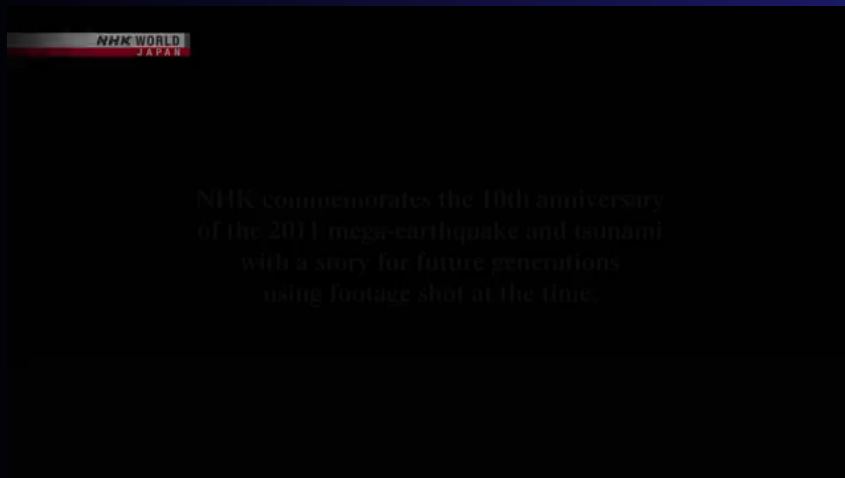
経験なき世代が中心の社会への移行

2

「死」への恐怖が中心の防災教育



これらの資料を用いてどのように授業を構成しますか



指導参考資料集

実践的な 防災教育の手引き

令和6年3月

中学校・高等学校編

【実践事例集】

- 事前、訓練、振り返りの3ステップで実施する防災教育プログラム【洪水】
- 事前、訓練、振り返りの3ステップで実施する防災教育プログラム【津波】
- 事前、訓練、振り返りの3ステップで実施する防災教育プログラム【地震】
- 事前、訓練、振り返りの3ステップで実施する防災教育プログラム【火山】
- 登下校中の大地震を想定した避難訓練
- 部活動時発災を想定した避難訓練
- 犠牲者0を目指して一防災キャンプの実施—
- 火災を想定した避難訓練
- 生徒が企画・運営する合同防災訓練
- 地域と連携した避難訓練等の実施による防災学習の自校化
- 避難訓練と小中連携の引き渡し訓練
- てんでんこレンジャーが園児や小学生に防災の啓発
- 高校生が開発した防災カードゲーム
- 日常に防災視点を加えよう
- 命にかかわる大問題—災害時のトイレと向き合おう—
- 災害から生き抜く自分を描く「防災小説」
- 4コマ漫画教材—避難所運営を疑似体験する—
- 生徒が主体的に取り組む避難所運営活動
- 防災学習日を通じて、学校と地域が一体となって進める防災教育
- 復興・防災マップの取組—過去から学ぼう 未来へつなげよう—
- もしも明日災害が発生するとしたら、今日、何をする！？
- 時系列で災害対応を考えよう
- みんなでつくるWebハザードマップ
- 自然災害伝承碑から防災・減災を学ぶには

実践的な 防災教育の手引き

令和6年3月

中学校・高等学校編



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

【具体的な実践例】

- 防災授業・講座・レクチャー（座学・知識学習）
- 被災体験談・語り部講話
- 過去の災害ケーススタディ
- ハザードマップの読み方講習
- クロスロード（ジレンマ思考のカードゲーム）
- DIG（災害図上訓練）
- HUG（避難所運営ゲーム）
- 防災かるた・防災すごろく
- 防災クイズ・スタンプラリー
- まち歩き・タウンウォッチング（地域点検・危険個所の確認）
- 防災マップづくり（自分たちの避難ルート作成）
- 起震車での揺れ体験
- 煙体験施設での避難体験
- 風水害・風洞体験
- 非常食の調理・試食体験（アルファ化米や缶詰など）
- 避難所体験・ダンボールベッド組み立て・一泊体験
- 応急手当・心肺蘇生・AED講習
- 身近な物を使った救護体験（毛布担架や三角巾）
- 消火器・消火栓を使った初期消火体験
- 家具固定・耐震対策のワークショップ
- シェイクアウト訓練（一斉・短時間での safe 姿勢確保）
- シナリオ非公開型避難訓練（ブラインド訓練）
- 夜間・悪天候を想定した避難訓練
- 災害対策本部での図上ロールプレイング訓練
- 安否確認・伝言ダイヤル（171）体験訓練
- VR・AR技術を活用した浸水・火災疑似体験
- 防災アプリ・デジタルハザードマップの操作体験
- 防災キャンプ・アウトドア防災（電気・水道なしの生活体験）
- 防災ピクトグラム・標識の探索・学習
- マイ・タイムライン（個人の防災行動計画）づくり

March 12

March 11

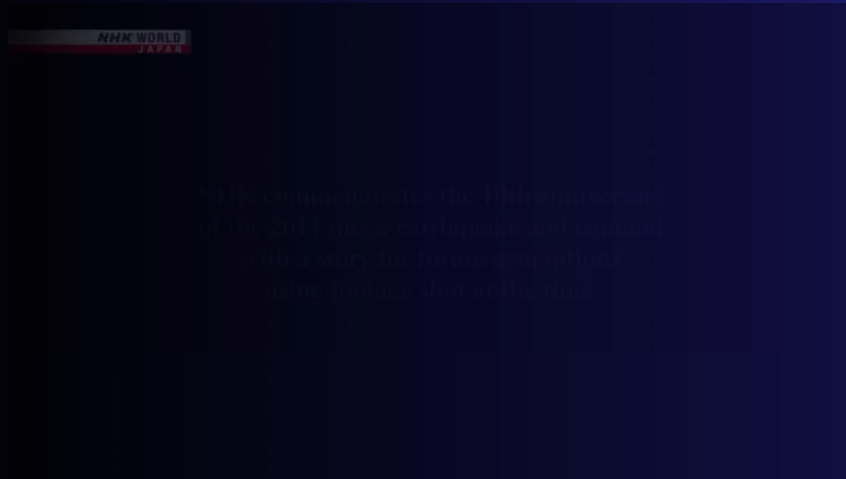
指導参考資料集

実践的な 防災教育の手引き

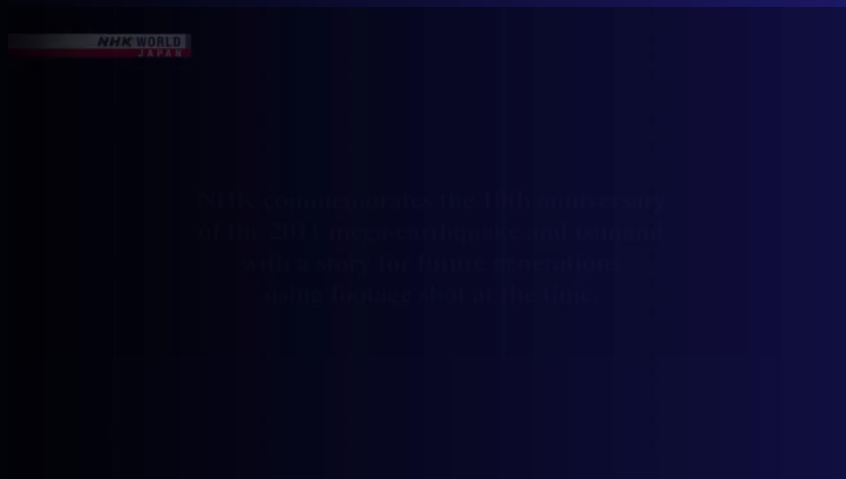
令和6年3月

中学校・高等学校編

= 死なないための技術



「死」への恐怖が中心の防災教育



逃げろ。



生き続けろ。
君の命には、生き続ける価値がある。



1

経験なき世代が中心の社会への移行

2

「死」への恐怖が中心の防災教育



災害に向き合う教育としての

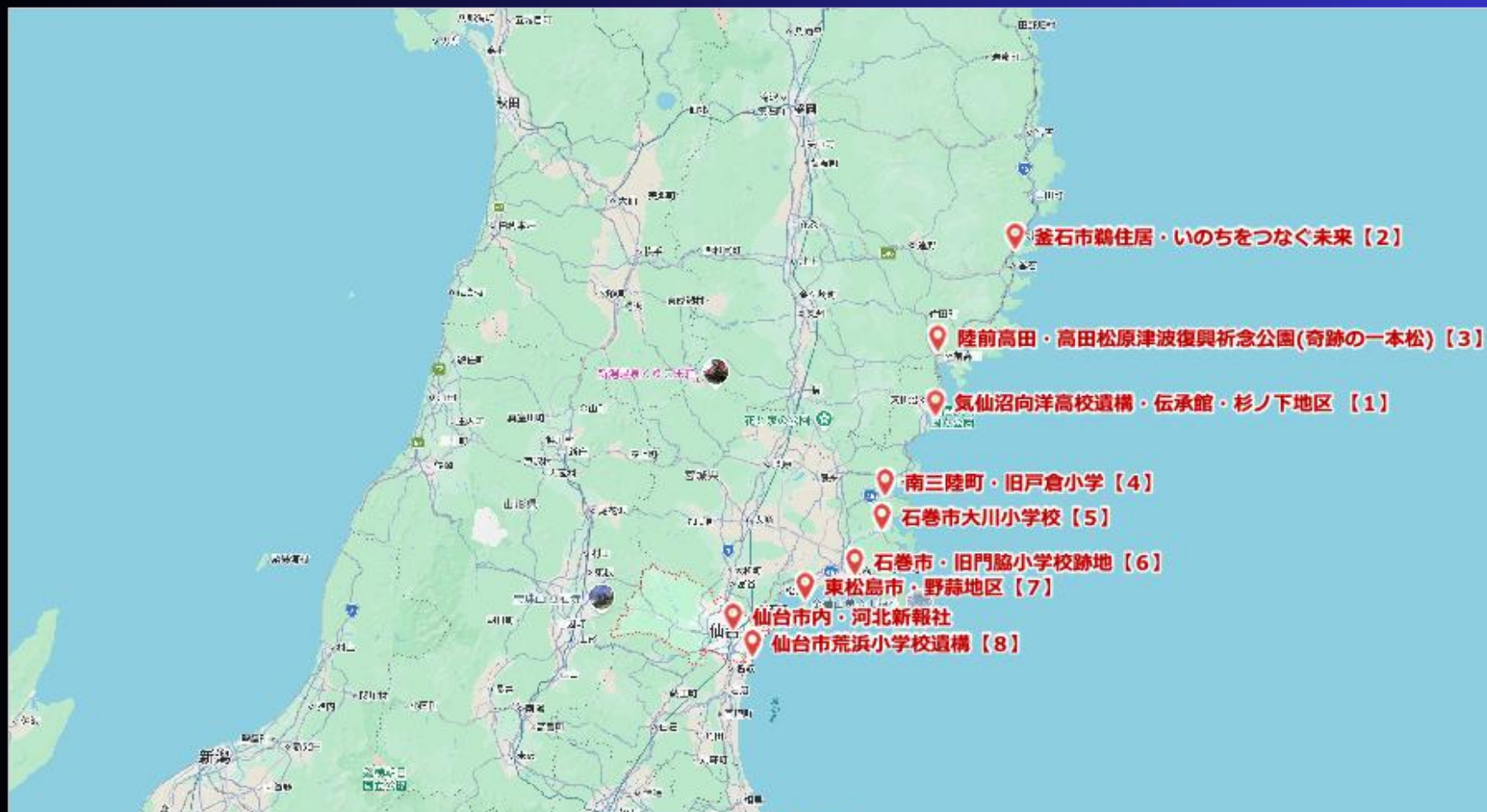
希望の防災

Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



02 この「問い」に向き合う理由



視察先(【 】内の番号は視察順)

02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



2階ホールの天井から
顔ひとつ分の隙間を残す
高さまで津波が到達

* 刊登日期: 2019年(平成31)年1月1日(周六)

『東日本大震災 釜石市証言・記録集』には、防災センターで被災し、九死に一生を得た方々の証言が掲載され、当時の様子を生々しく物語っています。

天と異い物をしているとき地面においた。異い客の大半は平地の人で、いっせいに噴進銃の近郊の防災センターへ逃げたらしい。私もあとを追いついた。防災センターでは、一緒に避難してきた人たちが、津波被害の有無を尋ねたり、さしたる緊張感もなく話していた。防災センターの2階上へ上ると、公衆電話機のサークルのたがが数本、雑踏を、大ホールにも10人近い人が避難していました。駐車場にも大勢が集って来たので、「ここにいればまず安全!」と思いました。地震発生から25分ほどこのように。

車道が部屋に入ってきて、あっというまに修繕
と化しました。高さ4m近い2階大ホールが車道
いっぱいになり、みなアップアップの状態でま
きながら、震ひとつかめない距離から口を出
てなんとか囁き合っていました。

壊れた天井の木材、天井スピーカー、カーテン
、みな必死でさがみつきました。しかし、100
以上いたの、さがつくものも定数限りなし。

井根をはがそうと手でドンドンたたく人もいま
が、それともがわず、ついに黒い波の中に沈
んでいきました。

津波が引いたあとで、座るように横たわる遺体を
を目にしました。その後、津波は繰り返し押し寄
せてきました。幸い、ホールに移動する場所に
防災備蓄倉庫があったので、そこへ移りました。傷
害したものを布巾をかさに隠せば、机や椅子の
上に乗り、互いにかさを寄せて寒さをしのぎ、
救助を待ちました。妻がから低体温症になり、命を
落としました。翌日もしました。

翌日も、数々亡くなりました。救助は来ず、近
くもなくなり、「終わりだな」と死を覚悟した
3日目の夜近く、自衛隊の救助隊が防災センター
の屋上へ降りてきました。

30分後、津
町を呑み

ターの2階
とに避難
に沈んで
は、重なる
収容され
名でした。

02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



希望のかけ橋とベルトコンベアの基礎

Dream Bridge (Kibou-no-Kakehashi) and the foundation of the conveyor belt

希望のかけ橋 Dream Bridge

東日本大震災津波で壊滅的な被害を受けた陸前高田市では、高さ10m以上に及ぶ市街地のかさ上げ盛土工事が行われました。その工事で土砂を運搬した巨大ベルトコンベアとそのためのつり橋希望のかけ橋の基礎部分が、ここに残されています。気仙川をはさんで、高台の宅地造成のために掘削した土砂を、市街地のかさ上げ盛土用に運んだベルトコンベアは、幅1.8m、全長3km、2014年（平成26年）3月末から2015年（平成27年）9月までの輸送期間中に運んだ土砂は500万m³、これは、かさ上げ盛土に必要な1200万m³の約4割にあたり、10tトラックなら9年ほどかかる運搬作業を1年半に縮短しました。市内の小学生に公募し決定した愛称は希望のかけ橋。「まちの復興と未来へのかけ橋に」との願いが込められました。

In Rikuzentakata City, which was devastated by the Great East Japan Earthquake and Tsunami, construction work to raise the ground level was carried out in an urban area with a height of more than 10 m. The foundation of the huge belt conveyor that carried the soil and sand debris during the construction, as well as the suspension portion of the Bridge of Hope built for that purpose, are left here. The soil and sand excavated for the construction of residential land on a hill across the Kesen River were carried over to the city area by the conveyor as a base to raise the ground level. It was 1.8 m wide and 3 km long. The total amount of debris carried during the operation period from the end of March 2014 until September 2015 was 5 million m³. This is about 40% of the 12 million m³ required for the ground elevation, and the transportation work, which would have taken about 9 years with a 10-ton truck, was shortened to one and a half years. The nickname for the conveyor belt that was chosen after a naming contest by elementary school students in the city was Dream Bridge, with a wish "for the reconstruction of the town and a bridge into the future" implied in its name.



市街地のかさ上げ盛土工事に活躍した巨大ベルトコンベア全景。1時間あたり6,000tの土砂を搬送することができ、1日平均約2万m³の土砂を搬送していました。
A panoramic view of the huge conveyor belt that was used for raising the ground level in the city. It was able to transport 6,000 tons of soil and sand per hour, which averaged about 20,000m³ per day.



気仙川にかかる希望のかけ橋。主塔間距離220mの長距離ベルトコンベア専用の仮設橋でした。
The Dream Bridge over the Kesen River. It was a temporary bridge dedicated to connect long distance belt conveyors with a distance of 220m between its main towers.

復興遺構として後世に伝える Passing on to the future generations as Reconstruction Memorial Ruins

2015年（平成27年）9月まで稼働し、被災した市街地のかさ上げ盛土工事の基礎として残された希望のかけ橋とベルトコンベアは、2016年（平成28年）1月から解体が始まりました。解体の途中より、気仙川をはさんだ市街地と高台の宅地造成のための土砂を運搬する役割を果たしました。ベルトコンベアと橋の基礎に当たっては、土砂のスピーディーな運搬はもたらした。土砂がアスファルト舗装された道路の両側に積み上げられ、市街地に支障をきたす必要のない状況が実現しました。復興への道のりは長く険しいものです。希望のかけ橋は、未来にあるような復興遺産として伝えられるものと、その基となる基礎を残しています。

The Dream Bridge and the conveyor belt, which operated until September 2015, achieved great results in shortening the construction period for raising and filling the damaged urban area. It was later dismantled in 2016. However, during the dismantling process, debris was used to prepare the urban area. When installing the conveyor belt and bridge, a suspension bridge-type structure was adopted that did not require the construction of abutments on the river. In consideration of the environment of the Kesen River where debris and casualties would not rise and for a speedy reconstruction of the city, debris. The road to recovery was long and steep. The Dream Bridge now plays a new role as a reconstruction memorial ruin that connects the long-term reconstruction process to future generations.



希望のかけ橋とともに復興のシンボルとして残ります。
Together with the Dream Bridge, it becomes a symbol of reconstruction.

02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



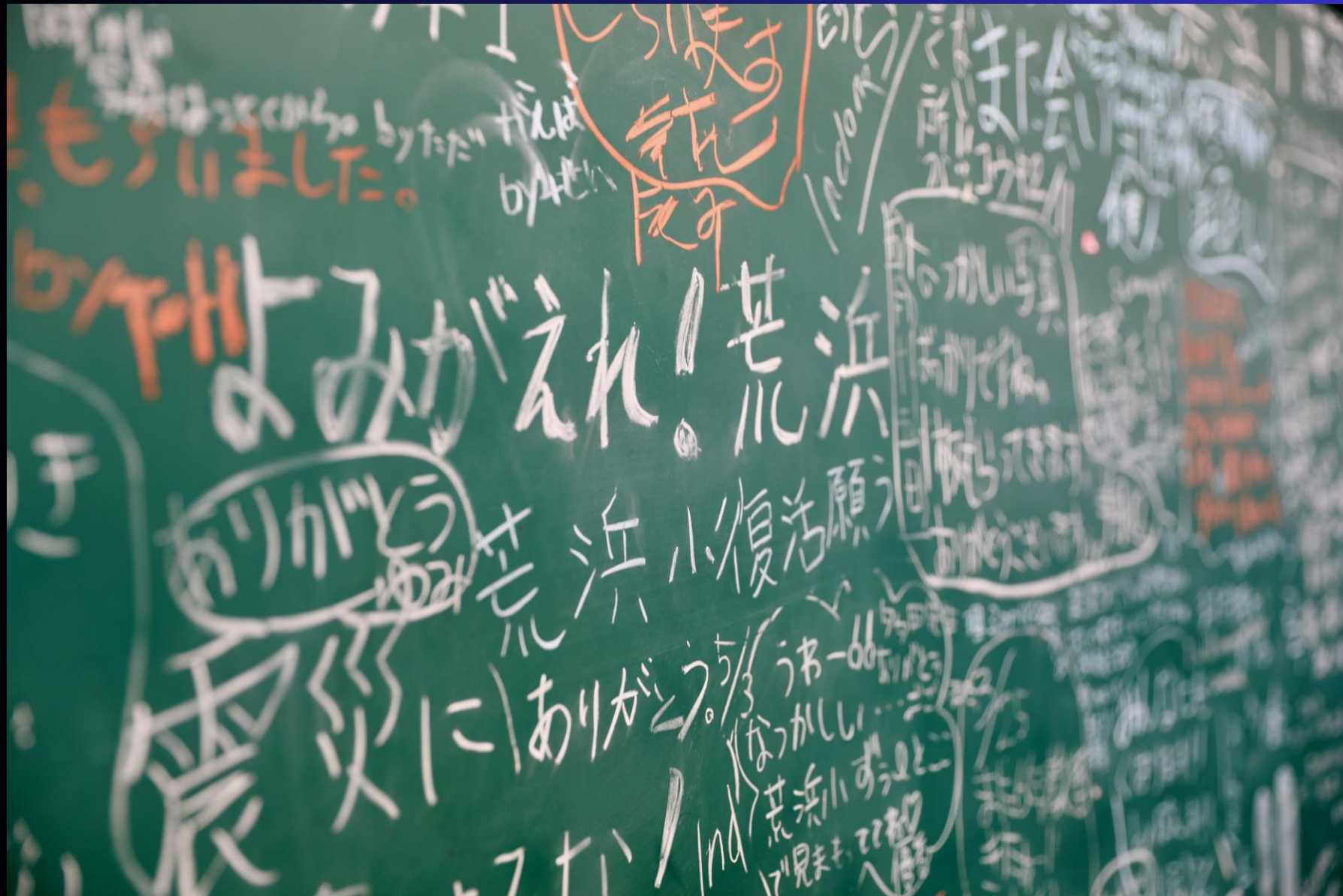
02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



02 この「問い」に向き合う理由



Buffer



Buffer

02 この「問い」に向き合う理由

2011年3月11日

いつもと同じ朝でした

「行ってきます」の後ろ姿を見送ったあの日

「寒かったでしょう」とあたたかい手で抱きしめてあげたい

March 11, 2011 —

It was a morning like any other.

On that day, we saw them off after telling each other "Have a nice day."

How we wish we could hold them in warm arms and say "It was cold, wasn't it?"

02 この「問い」に向き合う理由



March
It was a
a that d
we wish



授業の目標

2011年3月11日

いつもと同じ朝でした

「行ってきます」の後ろ姿を見送ったあの日

何のために、助からなくてはならないのか。

March 11, 2011 —

It was a morning like any other.

On that day, we saw them off after telling each other "Have a nice day."

We wish we could hold them in warm arms and say "It was cold, wasn't it?"

何のために、助からなくてはならないのか。

02 この「問い」に向き合う理由



「死なないこと」

02 この「問い」に向き合う理由



極限の恐怖が目の前に
迫ったときに単なる

「生物学的な生存への執着」
だけでは足が
すくんでしまうことがある

何のために、助からなくてはならないのか。

02 この「問い」に向き合う理由

「生きる」ことの定義



何のために、助からなくてはならないのか。



そのものを問い直す。

02 この「問い」に向き合う理由

自分が助かることで、
いつか必ず誰かを助けることができ、
それがひいては、
未来の復興を担う力になるから。

02 この「問い」に向き合う理由

絶対に生き残れる保証はないし、

絶対に生き残れる方法もない。

「生きる」目的意識こそが、

困難に立ち向かう真の強さを生むと信じて。

Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



03 授業を構築する3つのステップ

「希望の防災」授業の進み方(3ステップ)

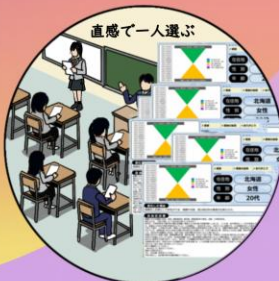
生存の先にある「どう生きるか」を問い直す授業

605人の大人の歩みを五感で追体験

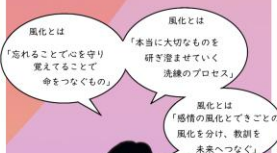
「何のために
助からなくては
ならないのか」

15年前の「あの日」の記憶をたどる

「風化」を自分なりに捉え直す



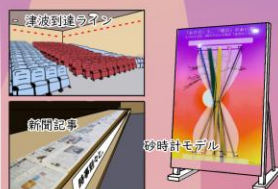
STEP1 教室で
「特定の1人」と向き合う



STEP2 被災者の人生に触れ
「風化」を自分の言葉で再定義する



▲自分自身の「生」に向き合い、生き抜く理由を考える



▲諸資料の見学と砂時計モデルの体験



▲災害時の「ケース対応」ワーク



▲東北の「現在」

STEP3 何のために
助からなくてはならないのか

段階	時間	形態	主な学習活動(詳細)	MYPアプローチとねらい
深化	1	学級	調査データの精読と抽出 ① アンケート調査の精読 600名のアンケート調査(2026年2月)の回答を精読する。 ② 最も関心を持った回答を1枚選び、その理由を記述する。	視点 (Perspective) ■「選別」の自己分析 膨大なデータの中から、なぜ自分はその一枚に共感したのか、あるいは関心をもったのか(記述の熱量、自分との共通点、あるいは違和感など)を自己分析する。
	2	学級	風化の定義と議論 ① 「風化とは何か」 「風化」をどう定義できるかを考察する。風化を受け入れなければ「今」を生きられないのか、風化を防がなければ「次」を生きられないのか、を考察する。 ② グループ内で共有する。	関係性 (Relationships) ■「風化」の概念化 単なる「忘却」ではなく、記憶が今の都合に合わせて「寛容」したり、「無関心」へと形を変えたりするプロセスを言語化する。 ■風化の是非(トレードオフの理解) 「防ぎすぎ(倫理)」と「避けられぬ(生存の適応)」の矛盾を検討する。風化を受け入れなければ「今」を生きられないのか、風化を防がなければ「次」を生きられないのか、そのジレンマを突き詰める。
日常的取組	随時	学年全体	砂時計モデルへの「糸通し」 ① 色糸通し アンケート調査の結果をもとに、色糸を砂時計モデルに通す作業を行う。糸が重なるほど抵抗(キツさ)が増す感覚を体験する。 ※ 砂時計モデルのデザインは生徒(1年3組 遊佐ひなた)によるものである。	複雑性の理解 ■社会の複雑性の身体化 一本の糸(個人の本音)を通すことは容易だが、社会全体に「重い本音」が隠れると、なぜ物事は通りにく(キツ)くなるのか。 ■葛藤の物理化 風化に抗おうとする想いや、日々の生存の想いが重なることで生じる「摩擦」を、手の感触として捉える。
授業の目標(問い): 何のために、助からなくてはならないのか。				
統合	3	ホール	事実の裏打ち ① 現在の東北 東北地方における最新の現地調査報告を提示(別添資料)する。 ② 「3.11」を過渡期から理解 地震、津波、原子力発電所事故、避難所等、各ケースに対して、自分には何ができるのだろうか。と、追体験しながら「3.11」への当事者意識を高める。	因果関係 (Causality) ■因果関係の特定 1-2時間目まで出会った「人々の苦悩や警告」は、具体的に、どの地点の、どのような物理的破壊(揺れ、津波、事故)から生じたのかを特定する。 ■空白の埋め 「非体験者ゆえの想像力の限界」を、現地視察の写真と追体験の学習活動によって補強し、授業の目標に迫っていく。
	4	ホール	生存の社会的使命 ① 問いと定義の共有 1-2時間目まで抽出した心に残った回答とその理由、各自が再定義した「風化」の概念をシェアし、多角的な視点を統合する。 ② 震災と風化 アンケート調査、砂時計モデル、新聞記事、概要資料、視聴映像等を設置し、見学を通じて個々の感覚で震災を理解する。特に、砂時計モデルでは、糸が重なり、抵抗が増す「くびれ」の感覚から、複雑な社会で日常に埋没していく風化の本質を、単なる忘却ではなく「懸命に生きる中で生じる摩擦」として理解する。 ③ 資料の見学 ④ なぜ助からなくてはならないのか 現地視察の経験をもった教師のメッセージを受け取り、本単元の核心的問いに向き合う。生存は利己的な執着ではなく、将来誰かを助け、未来を創るための「公への貢献」である」という視点から、生きる目的を再考する。	責任と行動 (Action) ■生存の公共性の認識 「自分の命を守ることが、将来の他者救済や復興の力に直結する」という「生存の社会的意義」を概念化する。 ■身体性を伴う教訓の深化 砂時計モデルを通じた「糸の抵抗感」という物理的実感を、社会の複雑さや風化の不可逆性と結びつけ、それでもなお「生きる」という意思決定の根拠にする。 ■未来へのコミットメント 被災地の破壊や喪失の事実に基づいた、誠実な「生存への意志」を確立し、予測不能な未来に対するメタ認知的な強さを養う。

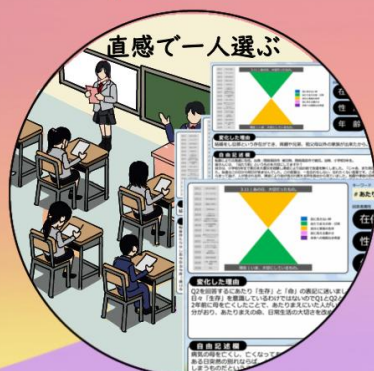
単元指導計画(本実践で使用した教材は巻末に巻末資料として全て掲載している。)

03 授業を構築する3つのステップ

「希望の防災」授業の進み方(3ステップ)

生存の先にある「どう生きるか」を問い直す授業

「何のために
助からなくては
ならないのか」



STEP1 教室で
「特定の一人」と向き合う

「風化」を自分なりに捉え直す

再定義された
「風化」の概念

風化とは
「忘れることで心を守り
覚えることで
命をつなぐもの」

風化とは
「本当に大切なものを
研ぎ澄ませていく
洗練のプロセス」

風化とは
「感情の風化と
できごとの風化を分け、
教訓を未来へつなぐ」

時間の経過を濾過として捉え直す

STEP2 被災者の人生に触れ
「風化」を自らの言葉で再定義する

605人の大人の歩みを五感で追体験



▲自分自身の「生」に向き合い、生き抜く理由を考える



▲諸資料の見学と砂時計モデルの体験



▲災害時の「ケース対応」ワーク



▲東北の「現在」

STEP3 何のために
助からなくてはならないのか

03 授業を構築する3つのステップ

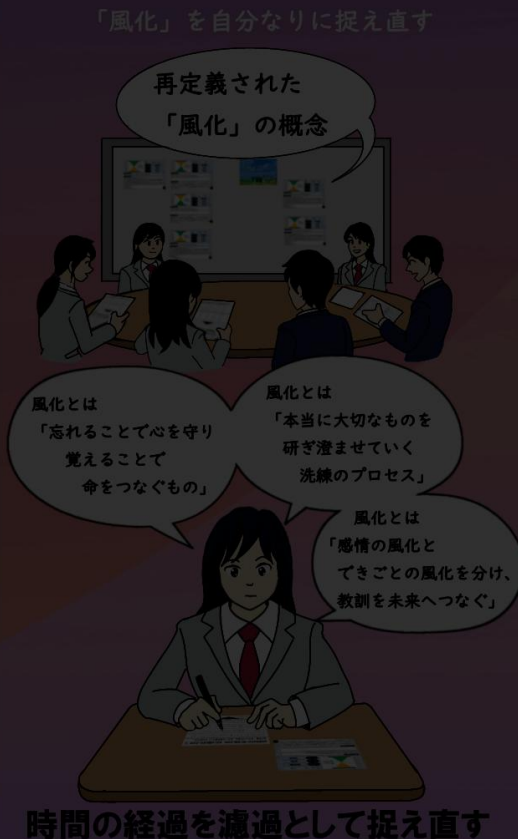
「希望の防災」授業の進み方(3ステップ)

生存の先にある「どう生きるか」を問い直す授業

「何のために
助からなくては
ならないのか」



STEP1 教室で
「特定の一人」と向き合う



時間の経過を濾過として捉え直す

STEP2 被災者の人生に触れ
「風化」を自らの言葉で再定義する

605人の大人の歩みを五感で追体験



▲自分自身の「生」に向き合い、生き抜く理由を考える



▲諸資料の見学と砂時計モデルの体験



▲災害時の「ケース対応」ワーク



▲東北の「現在」
(いま)

STEP3 何のために
助からなくてはならないのか

Buffer

社會科教論 藤澤和晴

アンケート調査（WEB回答）を実施

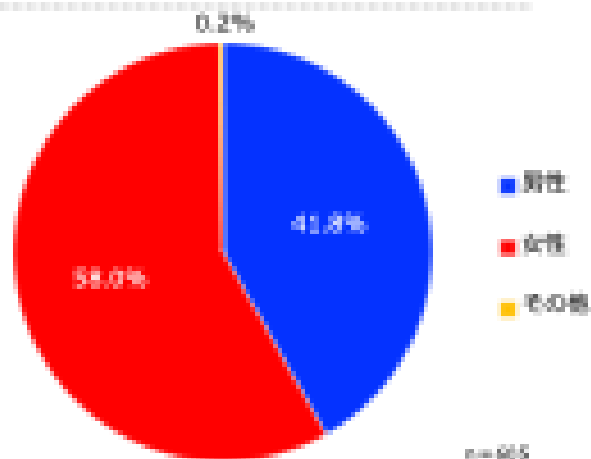
Webアンケート
個別メール、SNS、リーフレットによる依頼

[illegible]

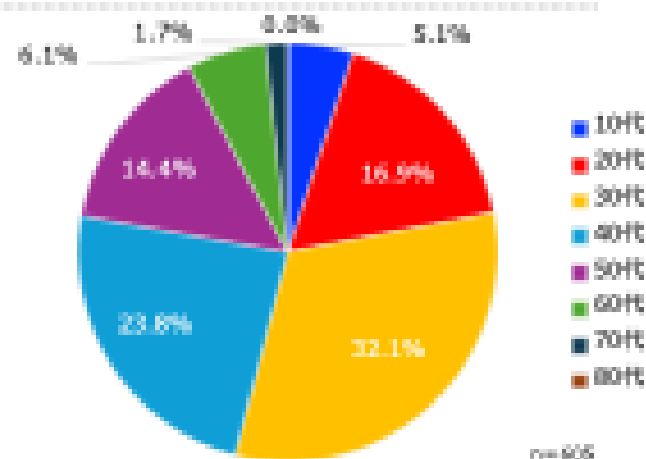
03 授業を構築する3つのステップ

◆調査結果 | 属性

性別 / Gender



階級別年齢 / Age group



準備段階

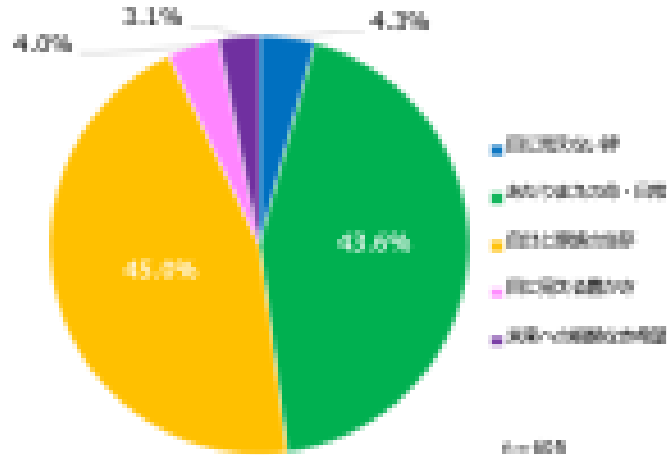
アンケート調査 (WEB回答) を実施

03 授業を構築する3つのステップ

◆調査結果 | 15年間の価値観の変化

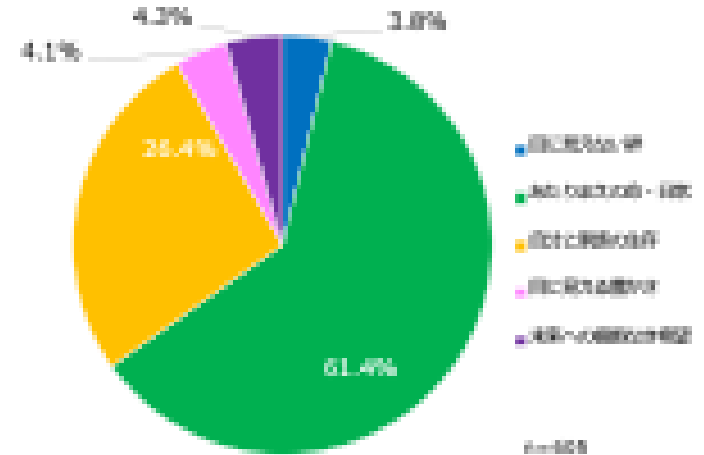
2011年（発災当時）

Q1：あの日、大切だったもの。



2026年（15年後＝現在）

Q2：いま、大切にしているもの。



準備段階

アンケート調査（WEB回答）を実施

03 授業を構築する3つのステップ

◆調査結果 | Q3: 変化した理由

1. 自衛官として「生と死」の境目に立ち会った方の記述 / 回答者 112 (30代・男性)

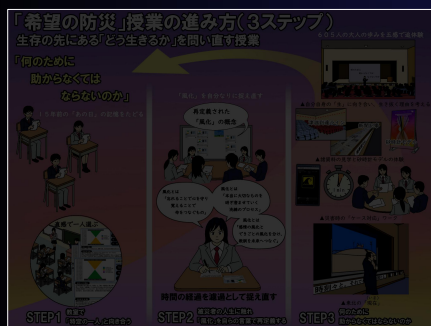
——当時、自衛官として被災地へ派遣されました。そこで目にしたのは、テレビや新聞では決して報じられることのない、凄惨極まる光景でした。泥にまみれた傷、積み上がった瓦礫、そして収容させていただいた多くのご遺体。人間の命の儚さと、自然の圧倒的な力を前に、ただただ無力感に打ちひしがれました。しかし、そんな中でも手を取り合い、前を向こうとする人々の姿に、人間の真の強さを教わりました。それ以来、自分自身の人生においても、「今、この瞬間」を度かのために、そして悔いなく生きることを強く意識するようになりました。

2. 親友を亡くし、「日常の崩壊」を経験した方の記述 / 回答者 48 (40代・男性)

——目の前で友人が津波に飲み込まれていくのを見ました。差し出した手が届かなかった。あの時の絶望感は一生消えません。それまでは、明日は必ず来ると信じて疑いませんでした。しかし、あの日を境に、日常がいかに脆く、奇跡的なバランスの上に成り立っているかを痛感しました。友人の分まで生きる、などと綺麗事は言えません。ただ、あの日失われた多くの「明日」の重みを感じながら、目の前の日常を踏みかき進めず生きていくことが、私にできる唯一のことだと思っています。

3. 現場での遺体収容と、その後の人生観 / 回答者 334 (50代・男性)

——当時、自衛官として被災地に入りました。瓦礫の中からご遺体を見つけ出し、収容する。その繰り返しの日々でした。泥にまみれた小さな靴や、ランドセルを見つけるたびに、胸が締め付けられる思いでした。メディアが報じる「感動の救出劇」の真側には、数えきれないほどの絶望があることを知りました。自衛官という職を辞めた今でも、あの時の泥の匂いや、寒さ、そしてご家族の泣き声が耳にこびりついて離れません。命を守るということはどういうことか。その重みを背負って、これからの人生を歩んでいこうと決意しました。



準備段階

アンケート調査 (WEB回答) を実施

03 授業を構築する3つのステップ

◆調査結果 | Q4：自由記述欄

1. 家族を亡くした喪失感と、語り継ぐ決意 / 回答者 205 (30代・女性)

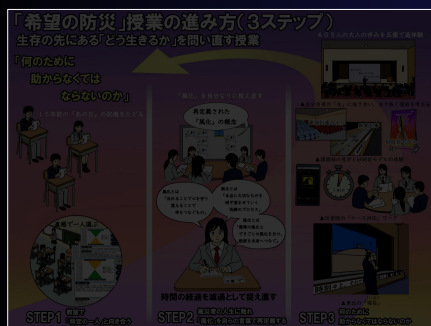
——震災で家族全員を亡くしました。あの日以来、私の世界からは色が消えました。15年という月日は、世間では「復興」という言葉で語られますが、私の中の時間はあの日のまま止まっています。生き残ってしまったことへの申し訳なさ、なぜ私だけが、という問いに答えは出ません。それでも、語り部として活動を経験することで、亡くなった家族が生きていた証を刻みたいと思っています。杜絶、という言葉では足りないほどの経験でしたが、それが私の、そして多くの被災者の「本当のこと」です。

2. 遺体安置所での経験と、生への問い / 回答者 477 (50代・女性)

——遺体安置所の受付ボランティアをしました。変わり果てた姿の家族と対面し、泣き崩れる人、絶叫する人、逆にあまりのショックに無表情になる人。人間の感情が極限まで揺さぶられる場に立ち会い、命というものの重さと輝きを骨の髄まで感じました。あの時の静まり返った体育館の空気感は、一生忘れることはできません。この資料に載る言葉たちが、単なるデータではなく、一人一人の書き出しの人生であることを忘れないでほしいです。

3. 「音のない世界」の記憶と、今も遠い上がる泥の冷たさ / 回答者 510 (40代・女性)

——津波が引いた後の、あの「音のない世界」を今でも夢に見ます。生きているのか、死んでいるのかも分からない、凍りつくような静寂。15年という月日が経ち、街の景色はすっかり綺麗になりましたが、私の心の中には今も、あの日積み上がった瓦礫がそのまま残っています。時折、ふとした瞬間に、あの時の泥の冷たさが足元から遠い上がってくるような感覚に襲われ、息ができなくなります。この調査結果が、単なる分析データとして消費されるのではなく、あの日以来、私たちが抱え続けている「声にならない叫び」そのものとして、誰かの心に深く届くことを切に願っています。



準備段階

アンケート調査（WEB回答）を実施

03 授業を構築する3つのステップ

◆調査結果データ（PDF）の見方

The screenshot displays a survey result PDF with the following elements:

- Timeline (Left):** A vertical timeline from 2011 to 2026. A large blue circle with the number '2' is overlaid on the timeline.
- Keywords (Top Right):** A section titled 'キーワード' with three categories: '# 未来', '# 当たり前', and '# 当事者意識'.
- Response Attributes (Middle Right):** A section titled '回答者属性' with three categories: '居住地' (Tokyo), '性別' (Female), and '年齢' (30s). A large blue circle with the number '1' is overlaid on this section.
- Changed Reason (Bottom Left):** A section titled '変化した理由' with a text area containing a response. A large blue circle with the number '3' is overlaid on this section.
- Free Text Description (Bottom Right):** A section titled '自由記述欄' with a text area containing a response. A large blue circle with the number '4' is overlaid on this section.

- 1 回答者の属性
- 2 価値観の変化(15年)
- 3 変化した理由
- 4 自由記述欄



データ版をダウンロードできます
<https://x.gd/SQYco>



準備段階

アンケート調査（WEB回答）を実施

03 授業を構築する3つのステップ

「希望の防災」授業の進み方(3ステップ)

生存の先にある「どう生きるか」を問い直す授業

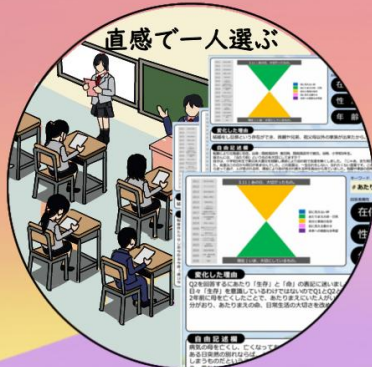
「何のために

助からなくては
ならないのか」

15年前の「あの日」の記憶をたどる



直感で一人選ぶ



STEP1 教室で
「特定の一人」と向き合う

「風化」を自分なりに捉え直す

再定義された
「風化」の概念



風化とは
「忘れることで心を守り
覚えることで
命をつなぐもの」

風化とは
「本当に大切なものを
研ぎ澄ませていく
洗練のプロセス」

風化とは
「感情の風化と
できごとの風化を分け、
教訓を未来へつなぐ」

時間の経過を濾過として捉え直す

STEP2 被災者の人生に触れ
「風化」を自らの言葉で再定義する

605人の大人の歩みを五感で追体験



▲自分自身の「生」に向き合い、生き抜く理由を考える



▲諸資料の見学と砂時計モデルの体験



▲災害時の「ケース対応」ワーク



▲東北の「現在」
(いま)

STEP3 何のために
助からなくてはならないのか

03 授業を構築する3つのステップ

■調査結果を読んで考えたこと（友達はどう感じている）

回答者 48（30代・男性）



——目の前で友人が津波に飲み込まれていくのを見ました。差し出した手が届かなかった。あの時の絶望感は一生消えません。それまでは、明日は必ず来ると信じて疑いませんでした。しかし、あの日を境に、日常がいかに脆く、奇跡的なバランスの上に成り立っているかを痛感しました。友人の分まで生きる、などと綺麗事は言えません。ただ、あの日失われた多くの「明日」の重みを感じながら、目の前の日常を疎かにせず生きていくことが、私にできる唯一のことだと思っています。

Q.なぜ関心をもったのか（生徒の意見）

私はあの日まだ生まれてせん。13年の人生の中でも大きな震災を受けたこともない辛者です。それは、目の前でご友人を亡くされ、あたりまえが奇跡と書いてもらって実感をえました。「友人の分まで生きる」という綺麗事は、私ももしそうになったら言えないと思う。あの日から15年。復興はしてきているかまだけ、心の傷は癒えないと思う。一生その重みは消えないと思う。それでもがんばって生きてる人を尊敬します。

※原文ママ

■調査結果を読んで考えたこと（友達はどう感じている）

回答者 205（30代・女性）



——震災で家族全員を亡くしました。あの日以来、私の世界からは色が消えましたが、15年という月日は、世間では「復興」という言葉で語られますが、私の中の時間はあの日のまま止まっています。生き残ってしまったことへの申し訳なさ、なぜ私だけがという問いに答えは出ません。それでも、語り部として活動を続けることで、亡くなった家族が生きていた証を刻みたいと思っています。杜絶、という言葉では足りないほどの経験でしたが、それが私の、そして多くの被災者の「本当のこと」です。

Q.なぜ関心をもったのか（生徒の意見）

家族がいるのは当たり前ではないということを痛感したことが共通点だったから。祖父が亡くなってから、自分の心に少し穴があいて悲しみと自分の無力さを痛感したから。

※原文ママ

■調査結果を読んで考えたこと（友達はどう感じている）

回答者 13（10代・男性）



——あの日をきっかけに、命や日常があたりまえではなく強く実感したから。失われてから気づくのではなく、失われる前から大切にしたいと思ったので、今も同じものを選んだ。

Q.なぜ関心をもったのか（生徒の意見）

「失われて気づくのではなく、失われる前から大切にしたい」と言っていたが、本当にその通りだと思った。失われた後だと手遅れだから、今を生きることが大切だと思った。

※原文ママ

■調査結果を読んで考えたこと（友達はどう感じている）

回答者 314（20代・女性）



——転勤により北海道に在住。出身：静岡県高田町。被災時：静岡県高田町で被災。当時、小学校5年生。皆さんには、「当たり前」というものを大切にしています。自分は、小学校5年生で東日本大震災を経験し津波により目の前で友達を無くしました。「じゃあ、また明日ね！」これが友達との最後の会話でした。友達をこの日から明日が過ぎたように感じた。この言葉は、一生忘れない、忘れたくない言葉です。この言葉を交わした後も自分自身も津波から逃げて逃げ、人が流される所、津波により家が流され無くなる所を遠くから見ていました。地震や津波の恐怖、何も出来ない悔しさが頭を占めました。当時、当時を思い出すと本当に世間で先の見えない状況でした。自分自身も、被災したことのない友達、親友や仲間、様々な経験をした。自分自身も経験をした。自分が「当たり前」の言葉を聞きながら生きています。友達とのたわいの無い会話、家族団圓な日常、家がある事、そんな「当たり前」が来るのが本当に幸せだと感じています。東日本大震災から今年で13年経とうとしています。今は自分も結婚し、子供が生まれてきました。震災を次の世代に伝える「当たり前」の大切や、震災時どのような事をしたらいいかを伝える使命があります。生き残った友達の分まで生きる為にも、いつか友達と会える日を願って生きていくように日々を過ごしています。今のこの「当たり前」を大切にしてください。周りに感謝をしてください。「ありがとう」を伝えてください。過去には戻りません。1日、1日を精一杯生きてください。今を大切に。目の前の幸せを噛み締めてください。

Q.なぜ関心をもったのか（生徒の意見）

「『じゃあまた明日ね！』これが友達との最後の会話でした」の部分を読んで、10年以上仲良くしている友達の顔を思い出したから。明日にはもうどちらかがいないのかもしれない。と考えると、怖くなったから。「当たり前を大切にしてください」という言葉に心を打たれたから。

※原文ママ



STEP 1

教室で「特定の1人」と向き合う

03 授業を構築する3つのステップ

「希望の防災」授業の進み方(3ステップ)

生存の先にある「どう生きるか」を問い直す授業

「何のために
助からなくては
ならないのか」



STEP1 教室で
「特定の一人」と向き合う

「風化」を自分なりに捉え直す

再定義された
「風化」の概念

風化とは
「忘れることで心を守り
覚えることで
命をつなぐもの」

風化とは
「本当に大切なものを
研ぎ澄ませていく
洗練のプロセス」

風化とは
「感情の風化と
できごとの風化を分け、
教訓を未来へつなぐ」

時間の経過を濾過として捉え直す

STEP2 被災者の人生に触れ
「風化」を自らの言葉で再定義する

605人の大人の歩みを五感で追体験



▲自分自身の「生」に向き合い、生き抜く理由を考える



▲諸資料の見学と砂時計モデルの体験



▲災害時の「ケース対応」ワーク



▲東北の「^(いま)現在」

STEP3 何のために
助からなくてはならないのか

03 授業を構築する3つのステップ

◆ワークシート 01

組 番 名前

■関心をもった回答番号（関心をもった回答番号を書き出しましょう。）

■1つに絞る

なぜ自分はその一枚に共感したのか、あるいは関心をもったのか（記述の熱量、自分との共通点、あるいは違和感など）を分析する。

■風化の再定義

「風化」とは何か。風化を受け入れなければ「今」を生きられないのか、風化を防がなければ「次」を生きられないのか、考えましょう。

■関心をもった回答番号（関心をもった回答番号を書き出しましょう。）

112	175	176	314	334

■1つに絞る

なぜ自分はその一枚に共感したのか、あるいは関心をもったのか（記述の熱量、自分との共通点、あるいは違和感など）を分析する。

人々たちの反応が様々で、実際に経験していないからより、奇妙に感じられた。なれないもので行くあてもなかった。ただ、うることしかできない。絶望感や不安は想像もできないものだったと思う。それでも家族や友人からの連絡や助けは大きな救い。それが、希望だったのかなと思った。

■風化の再定義

「風化」とは何か。風化を受け入れなければ「今」を生きられないのか、風化を防がなければ「次」を生きられないのか、考えましょう。

一生、悲しみの後悔を背負い続ける人はとても苦しいことだから、「感情」の風化は受け入れねばならないと思う。だけれど「できごと」の風化は忘れたいし悲しみを乗り越えたい。後悔を味方してしまうから防がないといけないと思う。

生徒が記入したワークシート「風化の再定義」



STEP 2

被災者の人生に触れ、
「風化」を自らの言葉で再定義する。

03 授業を構築する3つのステップ

Q.風化とは何か

一生、苦しみや後悔を背負い続けるのはとても苦しいことだから、「感情」の風化は受け入れるべきだと思う。だけれど「できごと」の風化は忘れたら同じ悲しみや、それ以上の後悔を味わってしまうから防がないといけないと思う。

風化は受け入れても今も次も生きられると思う。誰かが語り継いで若い世代の人に伝え、次の準備をしていかなければならないと思う。

風化とは「忘れることで心を守り、覚えていることで命をつなぐ」ものだと、私は思います。



STEP 2

被災者の人生に触れ、
「風化」を自らの言葉で再定義する。

03 授業を構築する3つのステップ

Q.風化とは何か

一生、苦しみや後悔を背負い続けるのはとても苦しいことだから、「感情」の風化は受け入れるべきだと思う。だけれど「できごと」の風化は忘れたら同じ悲しみや、それ以上の後悔を味わってしまうから防がないといけないと思う。

風化は受け入れても今も次も生きられると思う。誰かが語り継いで若い世代の人に伝え、次の準備をしていかなければならないと思う。

風化とは「忘れることで心を守り、覚えていることで命をつなぐ」ものだと、私は思います。



STEP 2

被災者の人生に触れ、
「風化」を自らの言葉で再定義する。

03 授業を構築する3つのステップ

Q.風化とは何か

一生、苦しみや後悔を背負い続けるのはとても苦しいことだから、「感情」の風化は受け入れるべきだと思う。だけれど「できごと」の風化は忘れたら同じ悲しみや、それ以上の後悔を味わってしまうから防がないといけないと思う。

風化は受け入れても今も次も生きられると思う。誰かが語り継いで若い世代の人に伝え、次の準備をしていかなければならないと思う。

風化とは「忘れることで心を守り、覚えていることで命をつなぐ」ものだと、私は思います。



STEP 2

被災者の人生に触れ、
「風化」を自らの言葉で再定義する。

03 授業を構築する3つのステップ

Q.風化とは何か

人々が震災を受けて得た教訓が忘れられていく、当たり前としてうもれていくのが風化だと思う。たくさんものを失ったが、その代わり人々はそれでしか気づけなかった多くのことを知った。だからこそ、失ったものを心にとどめ、得たものを忘れないようにしなければならないと思う。つまり、風化を防がなければ、震災から何も残らない。次も多くを失い、こうかいし、苦しんでしまうと思う。

「風化」とは皆が忘れたフリをすることだと思う。忘れてはいけないと分かっているけど思い出すと辛くなる。だから忘れたフリをする。だけど、そのフリを続ければ、その辛さをずっと持ち歩くことになる。それはしんどいから、後世に受け継がれて、その時の辛さをリレーしている。だから、風化を防がなければ「次」を生きられないと思う。



STEP 2

被災者の人生に触れ、
「風化」を自らの言葉で再定義する。

03 授業を構築する3つのステップ

「希望の防災」授業の進み方(3ステップ)

生存の先にある「どう生きるか」を問い直す授業

「何のために
助からなくては
ならないのか」

「風化」を自分なりに捉え直す

605人の大人の歩みを五感で追体験



▲自分自身の「生」に向き合い、生き抜く理由を考える



▲諸資料の見学と砂時計モデルの体験



▲災害時の「ケース対応」ワーク



▲東北の「現在」

STEP3 何のために
助からなくてはならないのか

15年前の「あの日」の記憶をたどる



直感で一人選ぶ



STEP1 教室で
「特定の一人」と向き合う

再定義された
「風化」の概念



風化とは
「忘れることで心を守り
覚えることで
命をつなぐもの」

風化とは
「本当に大切なものを
研ぎ澄ませていく
洗練のプロセス」

風化とは
「感情の風化と
できごとの風化を分け、
教訓を未来へつなぐ」

時間の経過を濾過として捉え直す

STEP2 被災者の人生に触れ
「風化」を自らの言葉で再定義する

03 授業を構築する3つのステップ



STEP 3

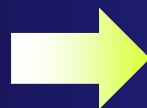
何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

① 東北の「いま」



情報の「正確さ」



語り手の「切実さ」



STEP 3

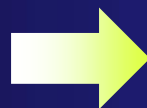
何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

② ケース対応のワーク



「自分には関係ない」



当事者として向き合う



STEP 3

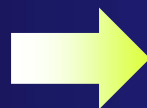
何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

② ケース対応のワーク



「自分には関係ない」



当事者として向き合う

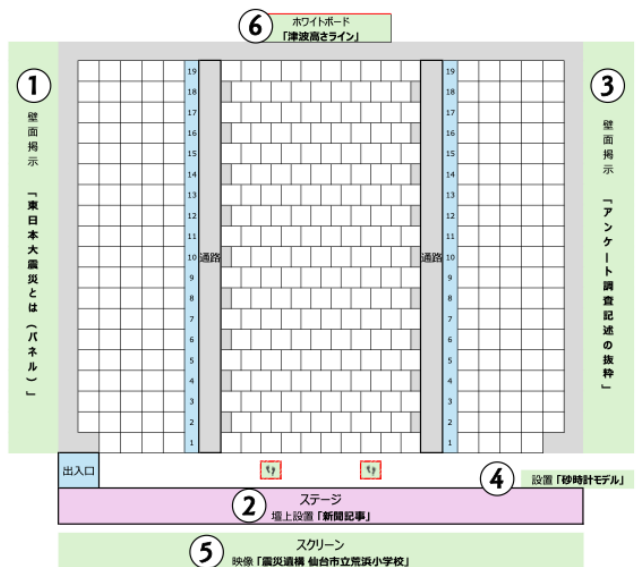


STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）



▼設置資料

- ① 東日本大震災とは（パネル）
- ② 新聞記事（発災～数日間）
- ③ アンケート調査
- ④ 砂時計モデル
実際に糸を通してみましょう。
ポストカードはご自由にお取りください。
- ⑤ 映像「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」
- ⑥ 津波の高さを実感
前方赤枠内に立ちホール後方の赤ラインを見ましょう。
想像してください。津波の高さを実感しましょう。



STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）

① 壁面掲示
「東日本大震災とは（パネル）」

② ステージ
壇上設置「新聞記事」

③ 壁面掲示
「アンケート調査記録の抜粋」

④ 設置「砂時計モデル」

⑤ スクリーン
映像「震災遺構 仙台市立荒浜中学校」

⑥ ホワイトボード
「津波高さライン」

▼設置資料
① 東日本大震災とは（パネル）
② 新聞記事（発災～数日間）
③ アンケート調査
④ 砂時計モデル 実際に糸を通してみましょう。 ポストカードはご自由にお取りください。
⑤ 映像「震災遺構 仙台市立荒浜中学校」
⑥ 津波の高さを実感 前方赤枠内に立ちホール後方の赤ラインを見ましょう。 想像してください。津波の高さを実感しましょう。



東日本大震災 概要資料



東日本大震災の全体像を俯瞰する

「希望の防災授業の進め方（3ステップ）」

生存の先にある「どう生きるか」を問う授業

「何のために、助からなくてはならないのか」

STEP1 防災の基礎知識を学ぶ

STEP2 防災の応用知識を学ぶ

STEP3 防災の応用知識を学ぶ

STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）

⑥ ホワイトボード
「津波の高さライン」

① 壁面掲示
「東日本大震災とは（パネル）」

③ 壁面掲示
「アンケート調査記録の抜粋」

② ステージ
壇上設置「新聞記事」

④ 設置「砂時計モデル」

⑤ スクリーン
映像「震災速報 仙台市立荒浜小学校」

▼設置資料

①	東日本大震災とは（パネル）
②	新聞記事（発災～数日間）
③	アンケート調査
④	砂時計モデル 実際に糸を通してみましょう。 ポストカードはご自由にお取りください。
⑤	映像「震災速報 仙台市立荒浜中学校」
⑥	津波の高さを実感 前方赤枠内に立ちホール後方の赤ラインを見ましょう。 想像してください。津波の高さを実感しましょう。



発災から4ヶ月分の新聞記事



抗えない時間の流れと、記憶の風化を、生徒たちに突きつける。



STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）

⑥ ホワイトボード
「津波の高さライン」

① 壁面掲示
「東日本大震災とは（パネル）」

③ 壁面掲示
「アンケート調査記録の抜粋」

② ステージ
壇上設置「新聞記事」

④ 設置「砂時計モデル」

⑤ スクリーン
映像「震災遺構 仙台市立荒浜中学校」

▼設置資料

①	東日本大震災とは（パネル）
②	新聞記事（震災～数日間）
③	アンケート調査
④	砂時計モデル 実際に糸を通してみましょう。 ポストカードはご自由にお取りください。
⑤	映像「震災遺構 仙台市立荒浜中学校」
⑥	津波の高さを実感 前方赤枠内に立ちホール後方の赤ラインを見ましょう。 想像してください。津波の高さを実感しましょう。



大川小を襲った津波高のライン



圧倒的な事実が、
リアリティを持って迫ってくる。



STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）

① 壁面掲示
「東日本大震災とは（パネル）」

② ステージ
壇上設置「新聞記事」

③ 壁面掲示
「アンケート調査記録の抜粋」

④ 設置「砂時計モデル」

⑤ スクリーン
映像「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」

⑥ ホワイトボード
「津波の高さライン」

▼設置資料
① 東日本大震災とは（パネル）
② 新聞記事（発災～数日間）
③ アンケート調査
④ 砂時計モデル 実際に糸を通してみましょう。 ポストカードはご自由にお取りください。
⑤ 映像「震災遺構 仙台市立荒浜中学校」
⑥ 津波の高さを実感 前方赤枠内に立ちホール後方の赤ラインを見ましょう。 想像してください。津波の高さを実感しましょう。



ナラティブの抜粋



東日本大震災を、
「一人の人間」の言葉で捉える。

「希望の防災」授業の進め方（3ステップ）

生存の先にある「どう生きるか」を問い直す授業

「何のために、助からなくてはならないのか」

STEP1 導入
STEP2 本授業
STEP3 振り返り

STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）

⑥ ホワイトボード
「津波の高さライン」

① 壁面掲示
「東日本大震災とは（パネル）」

③ 壁面掲示
「アンケート調査記録の抜粋」

② ステージ
壇上設置「新聞記事」

④ 設置「砂時計モデル」

⑤ スクリーン
映像「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」

▼設置資料

① 東日本大震災とは（パネル）
② 新聞記事（発災～数日間）
③ アンケート調査
④ 砂時計モデル 実際に糸を通してみましょう。 ポストカードはご自由にお取りください。
⑤ 映像「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」
⑥ 津波の高さを実感 前方赤枠内に立ちホール後方の赤ラインを見ましょう。 想像してください。津波の高さを実感しましょう。



震災当事者たちが歩んできた15年という歳月の重みを、自らの生の軌跡をなぞるように追体験していく。

砂時計モデル



STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。



03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ



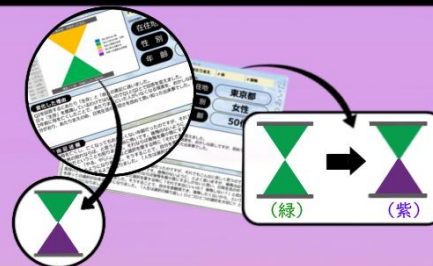
アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る



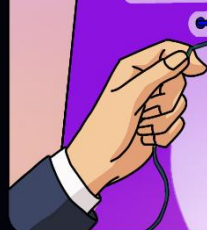
例: 震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける



手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる



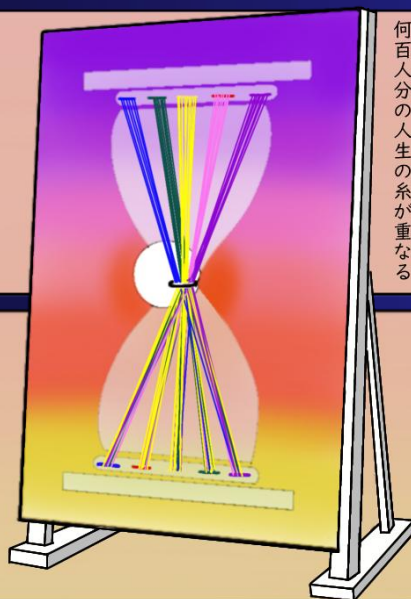
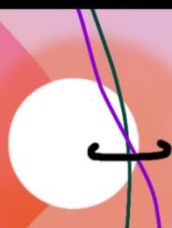
手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける



手順6: 「風化」を可視化する

最初の数本は
スムーズな糸通し



何百人分の人生の糸が重なる

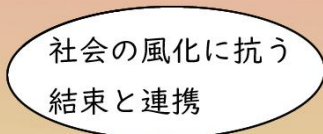
隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

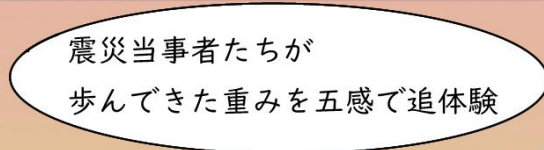


手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

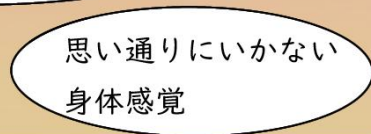
社会の風化に抗う
結束と連携



震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験



思い通りにいかない
身体感覚



03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ



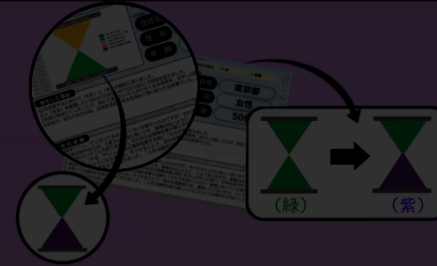
アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る



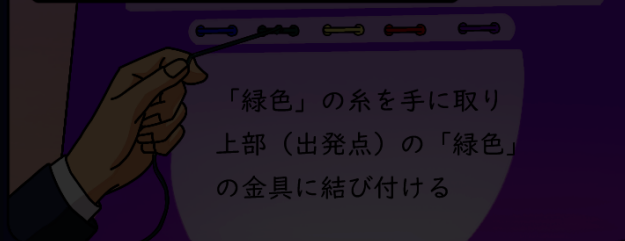
例: 震災直後は「当たり前」の日常(緑)

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

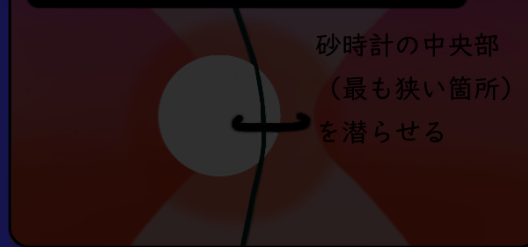
手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける



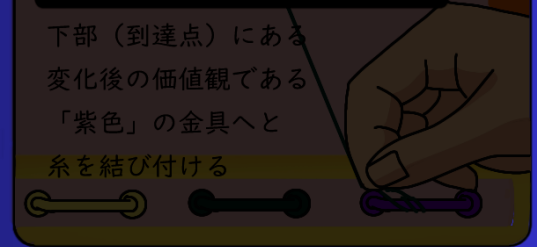
手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる



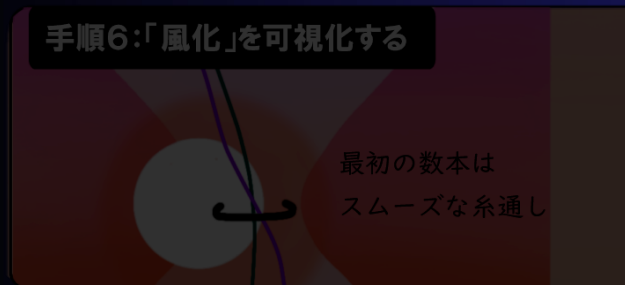
手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける



手順6: 「風化」を可視化する

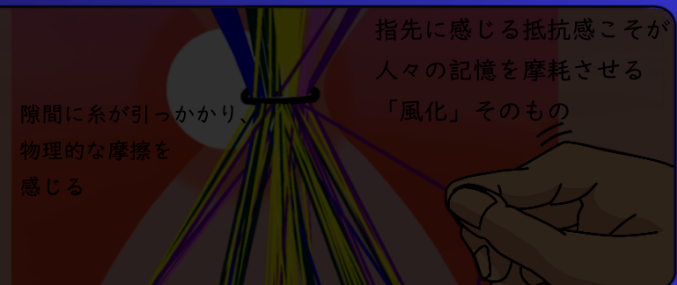
最初の数本は
スムーズな糸通し



何百人分の人生の糸が重なる

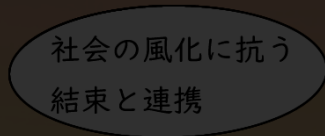
隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

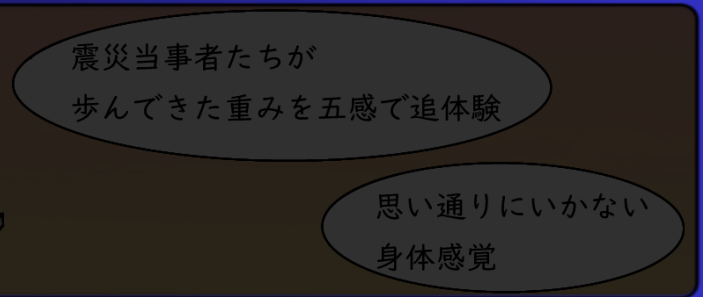


手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携



震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験



思い通りにいかない
身体感覚

03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

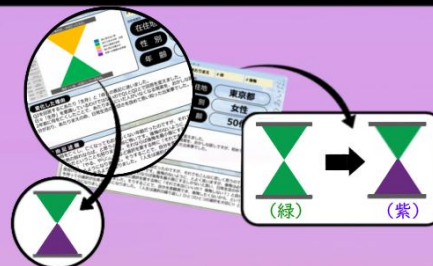
手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ

アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる



回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る

例：震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける

手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる

手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける

手順6: 「風化」を可視化する

最初の数本は
スムーズな糸通し

何百人分の人生の糸が重なる

隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携

震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験

思い通りにいかない
身体感覚

03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ

アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

↓ 5年間の心の変化を読み取る

例: 震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓ 5年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける

手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる

手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける

手順6: 「風化」を可視化する

最初の数本は
スムーズな糸通し

何百人分の人生の糸が重なる

隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携

震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験

思い通りにいかない
身体感覚

03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ



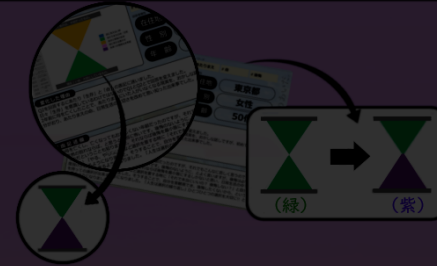
アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る



例: 震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

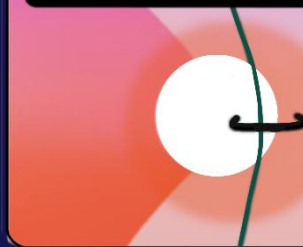
手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける



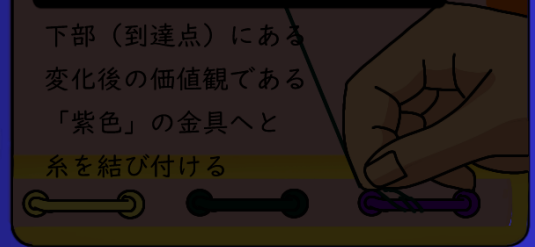
手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる



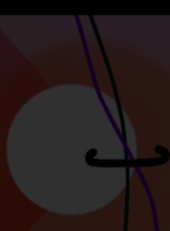
手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける



手順6: 「風化」を可視化する

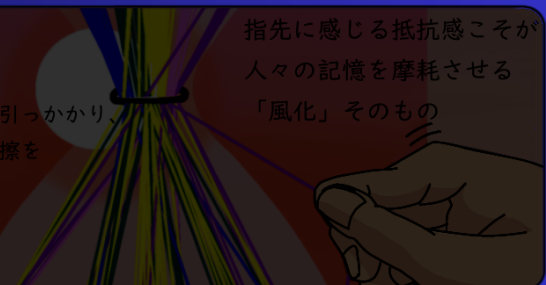
最初の数本は
スムーズな糸通し



何百人分の人生の糸が重なる

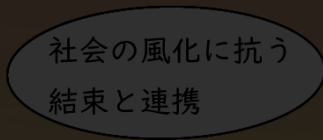
隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの



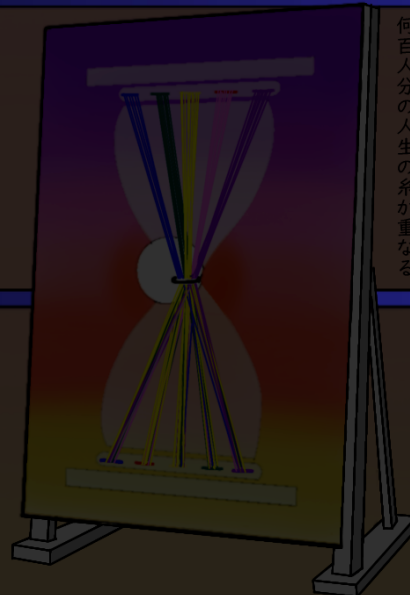
手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携



震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験

思い通りにいかない
身体感覚



03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ



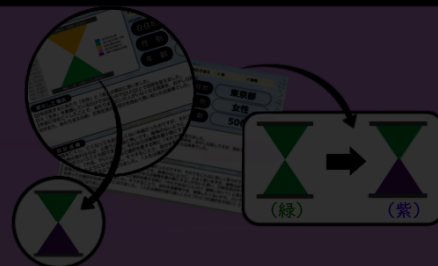
アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る



例: 震災直後は「当たり前」の日常(緑)

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける



手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる



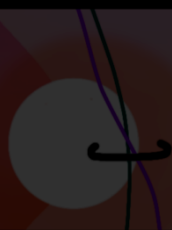
手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける



手順6: 「風化」を可視化する

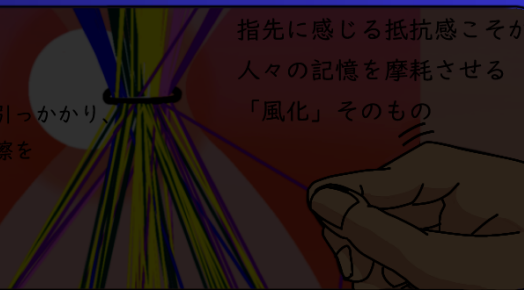
最初の数本は
スムーズな糸通し



何百人分の人生の糸が重なる

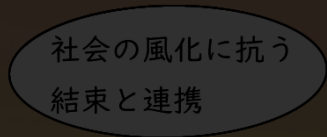
隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

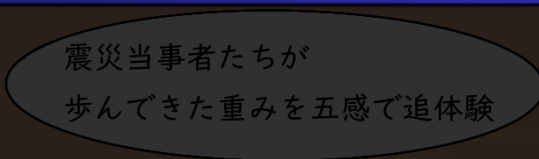


手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

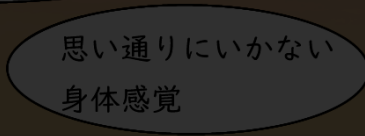
社会の風化に抗う
結束と連携



震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験



思い通りにいかない
身体感覚



03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ

アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る

例: 震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける

手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる

手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける

手順6: 「風化」を可視化する

最初の数本は
スムーズな糸通し

何百人分の人生の糸が重なる

隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携

震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験

思い通りにいかない
身体感覚

03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ

アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る

例: 震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける

手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる

手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける

手順6: 「風化」を可視化する

最初の数本は
スムーズな糸通し

何百人分の人生の糸が重なる

隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

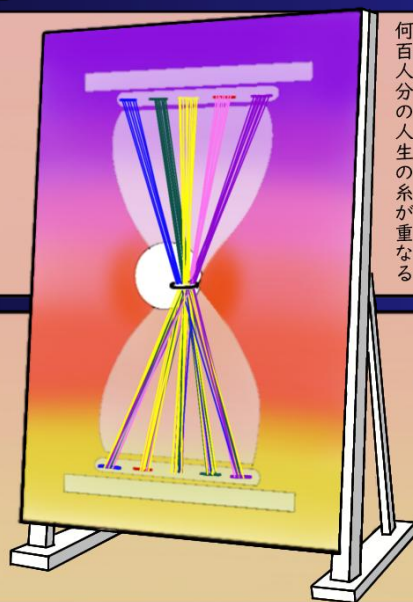
指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携

震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験

思い通りにいかない
身体感覚



03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ



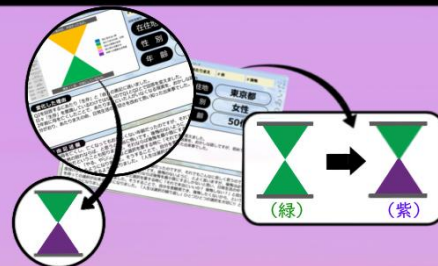
アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る



例: 震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける



手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる



手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける



手順6: 「風化」を可視化する

最初の数本は
スムーズな糸通し



何百人分の人生の糸が重なる

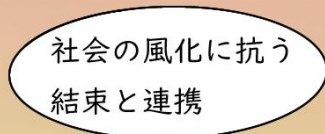
隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの



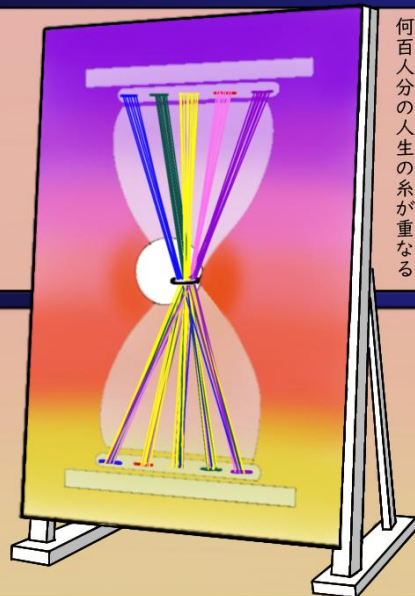
手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携



震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験

思い通りにいかない
身体感覚



03 授業を構築する3つのステップ

【砂時計モデルのワーク 手順図】 「震災から15年の歳月を自ら読み取る」 ※例：緑から紫の場合

手順1: 回答を選ぶ

アンケート回答から
任意の一枚を選ぶ

アンケート調査の5つ
の選択肢(価値観)

目に見えない絆
あたりまえの命・日常
自分と家族の生存
目に見える豊かさ
未来への根拠なき希望

手順2: 回答を読み、変化を読みとる

回答を読み込み

15年間の心の変化を読み取る

例: 震災直後は「当たり前の日常(緑)」

↓
15年後の現在は

「未来への根拠なき希望(紫)」

手順3: 上部に糸を結び付ける

「緑色」の糸を手に取り
上部(出発点)の「緑色」
の金具に結び付ける

手順4: 最も狭い箇所を潜らせる

砂時計の中央部
(最も狭い箇所)
を潜らせる

手順5: 下部に糸を結び付ける

下部(到達点)にある
変化後の価値観である
「紫色」の金具へと
糸を結び付ける

手順6: 「風化」を可視化する

最初の数本は
スムーズな糸通し

何百人分の人生の糸が

隙間に糸が引っかかり、
物理的な摩擦を
感じる

指先に感じる抵抗感こそが
人々の記憶を摩耗させる
「風化」そのもの

手順7: 15年の歳月を自ら感じ取る

社会の風化に抗う
結束と連携

震災当事者たちが
歩んできた重みを五感で追体験

思い通りにいかない
身体感覚

 = 風化

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）

⑥ ホワイトボード
「津波の高さライン」

① 壁面掲示
「東日本大震災とは（パネル）」

③ 壁面掲示
「アンケート調査記録の抜粋」

④ 設置「砂時計モデル」

② ステージ
壇上設置「新聞記事」

⑤ スクリーン
映像「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」

▼設置資料

① 東日本大震災とは（パネル）
② 新聞記事（発災～数日間）
③ アンケート調査
④ 砂時計モデル 実際に糸を通してみましょう。 ポストカードはご自由にお取りください。
⑤ 映像「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」
⑥ 津波の高さを実感 前方赤枠内に立ちホール後方の赤ラインを見ましょう。 想像してください。津波の高さを実感しましょう。



震災当事者たちが歩んできた15年という歳月の重みを、自らの生の軌跡をなぞるように追体験していく。

砂時計モデル



STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。



「あの日」と、「明日」のあいだ。
3.11から15年、600人の大人が語る「本当のこと」。



afinara

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）

▼作画者（生徒）の思い

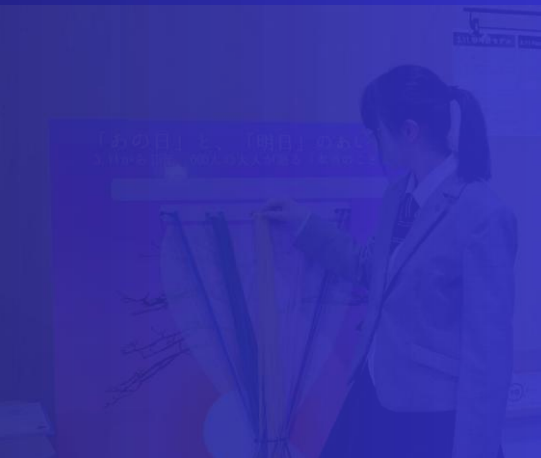
今回この作品を制作するにあたり、私が最も大切にしたのは「希望」というテーマです。

15年前のあの日から、深い絶望の中にありながらも、希望を見出し、今日まで復興を支えてこられた多くの方々があります。その歩みへの敬意と感謝を込めて、希望の象徴となる存在を探したとき、私の心に浮かんだのが、奇跡の一本松でした。

厳しい現実の中でも立ち続けたその姿は、多くの人に勇気を与えてきました。松の花言葉である「勇敢」や「繁栄」もまた、困難を乗り越え未来へ進むという今回のテーマにふさわしいものだと感じ、描くモチーフとして選びました。

背景の夕焼けには、「明日へつなぐ光」という意味を込めています。夕焼けは一日の終わりを象徴する一方で、次の日の始まりへと続く大切な時間でもあります。困難な出来事があったとしても、その先には必ず未来があり、希望の光が差し込むような想いを表現しました。

このような意義深いお仕事に携わる機会をいただいたことを、心より光栄でした！



3.11 砂時計モデル

▼説明
この「3.11 砂時計モデル」は、被災者30万人が被災した3年間の復興道の険しさを可視化したものです。中央の「V」は、激変する社会状況の転換点であり、被災者の苦闘と復興の希望が交差する瞬間を象徴しています。社会の痛みと個人の希望が交差する瞬間、被災者が抱えた苦闘（あるいは苦闘を乗り越えた瞬間）を象徴しています。被災者30万人が被災した3年間の復興道の険しさを可視化したものです。

▼作画者（生徒）の思い
今回この作品を制作するにあたり、私が最も大切にしたのは「希望」というテーマです。15年前のあの日から、深い絶望の中にありながらも、希望を見出し、今日まで復興を支えてこられた多くの方々があります。その歩みへの敬意と感謝を込めて、希望の象徴となる存在を探したとき、私の心に浮かんだのが、奇跡の一本松でした。厳しい現実の中でも立ち続けたその姿は、多くの人に勇気を与えてきました。松の花言葉である「勇敢」や「繁栄」もまた、困難を乗り越え未来へ進むという今回のテーマにふさわしいものだと感じ、描くモチーフとして選びました。背景の夕焼けには、「明日へつなぐ光」という意味を込めています。夕焼けは一日の終わりを象徴する一方で、次の日の始まりへと続く大切な時間でもあります。困難な出来事があったとしても、その先には必ず未来があり、希望の光が差し込むような想いを表現しました。このような意義深いお仕事に携わる機会をいただいたことを、心より光栄でした！

3.11 Hourglass Model

▼Description
The "3.11 Hourglass Model" visualizes the shifts in values experienced by over 30 disaster survivors over the past 15 years. The central "inversion" symbolizes the point of conflict where a rapidly changing society collides with memories of the disaster. By overlapping social trends with personal truths to understand why values changed—or remained the same—we can uncover the deeply personal motivations behind people's choices that students often cannot capture.

▼Artist's Statement
In creating this work, the theme I valued most was "hope". Since that day 15 years ago, many people have found hope amidst profound despair and sustained the recovery efforts to this day. Seeking a symbol of hope to express my respect and gratitude for their journey, the Miracle Pine Tree came to mind. Its steadfast presence, standing tall amidst harsh realities, has given courage to many. The pine's symbolic meanings of "bravery" and "prosperity" also fit fitting for this theme of overcoming hardship and moving forward into the future, leading me to choose it as my motif. The sunset in the background carries the meaning of "light connecting us to tomorrow". While sunset symbolizes the end of the day, it is also a crucial time leading into the next day's beginning. I expressed the sentiment that no matter how difficult the events, the future always lies ahead and light and hope will shine through. I was deeply honored to have the opportunity to be involved in such a meaningful project.



STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

③ 資料の見学（書資料の見学、砂時計モデル等）



3.11 砂時計モデル	3.11 Hourglass Model
▼説明 この「3.11 砂時計モデル」は、被災者600名が歩んだ15年間の価値観の転換を可視化したものです。中央の「夕陽」は、激動する社会と個人の記憶がぶつかり合う悲劇の現場を象徴しています。社会の動きと個人の歩みを重ね合わせ、価値観が変わった理由（あるいは変わらなかった理由）を追求。ここで、時計の針には刻み込まない、ひたすら静かな運命の物語が現れます。 15年という長い時間の中で記憶が日常に埋もれていく「風化」は、単なる忘却ではなく、記憶に寄りかかろうとしても生じてしまう「厚層」でもありません。この「厚層」を乗り越えることの難しさを芸術から読み、議論の起点にすること。それが、時間ごとではない持続可能な防災への第一歩となります。	▼Description The "3.11 Hourglass Model" visualizes the shifts in values experienced by over 600 disaster survivors over the past 15 years. The central "sunset" symbolizes the point of conflict where a rapidly changing society collides with memories of the disaster. By overlaying social trends with personal truths to understand why values changed—or remained the same—we can uncover the deeply personal motivations behind people's choices that statistics alone cannot capture. The "weathering" of memories as they fade into daily life over 15 years is not merely an act of forgetting it is a form of "thickening" that inevitably occurs as people strive to live their lives. Facing this "difficulty of holding onto losses" head-on and making it the starting point for discussion is a crucial first step toward authentic, sustainable disaster prevention—beyond mere platitudes.
▼作家の（生）意 今回この作品を制作するにあたり、私が最も大切にしたいのは「希望」というテーマです。 15年経つものの、深い絶望の中にありながらも、希望を見出し、今日まで復興を支えてくれた多くの方々がいます。その歩みへの敬意と感謝を込めて、希望の象徴となる夕陽を刻み込み、私の心に残るものの、哀愁の一本松でした。 新しい希望の芽を育てるという思いは、多くの人の心を育み育ててきました。松の花言葉である「勇敢」や「繁栄」もまた、困難を乗り越え未来へ進むという今回のテーマにふさわしいものだと感じ、強くテーマとして選びました。 背景の夕陽には、「明日へつなぐ光」という意味を込めています。夕陽は一日の終わりを象徴する一方で、次の日の朝はもう一度光り始める時間でもあります。困難な未来があったとしても、その先には必ず未来が来ると、希望の光を信じるように思いを表現しました。 このような意義深い仕事に携われる機会をいただけたことを、心より光栄を感じました。	▼Artist's Statement In creating this work, the theme I valued most was "hope". Since that day 15 years ago many people have found hope amidst profound despair and sustained the recovery efforts to this day. Seeking a symbol of hope to express my respect and gratitude for their journey, the Miracle Pine Tree came to mind. Its steadfast presence, standing tall amidst harsh realities, has given courage to many. The pine's symbolic meanings of "bravery" and "prosperity" also felt fitting for this theme of overcoming hardship and moving forward into the future, leading me to choose it as my motif. The sunset in the background carries the meaning of "light connecting us to tomorrow". While sunset symbolizes the end of the day, it is also a crucial time leading into the next day's beginning. I expressed the sentiment that no matter how difficult the events, the future always lies ahead, and light of hope will shine through. I was deeply honored to have the opportunity to be involved in such a meaningful project.

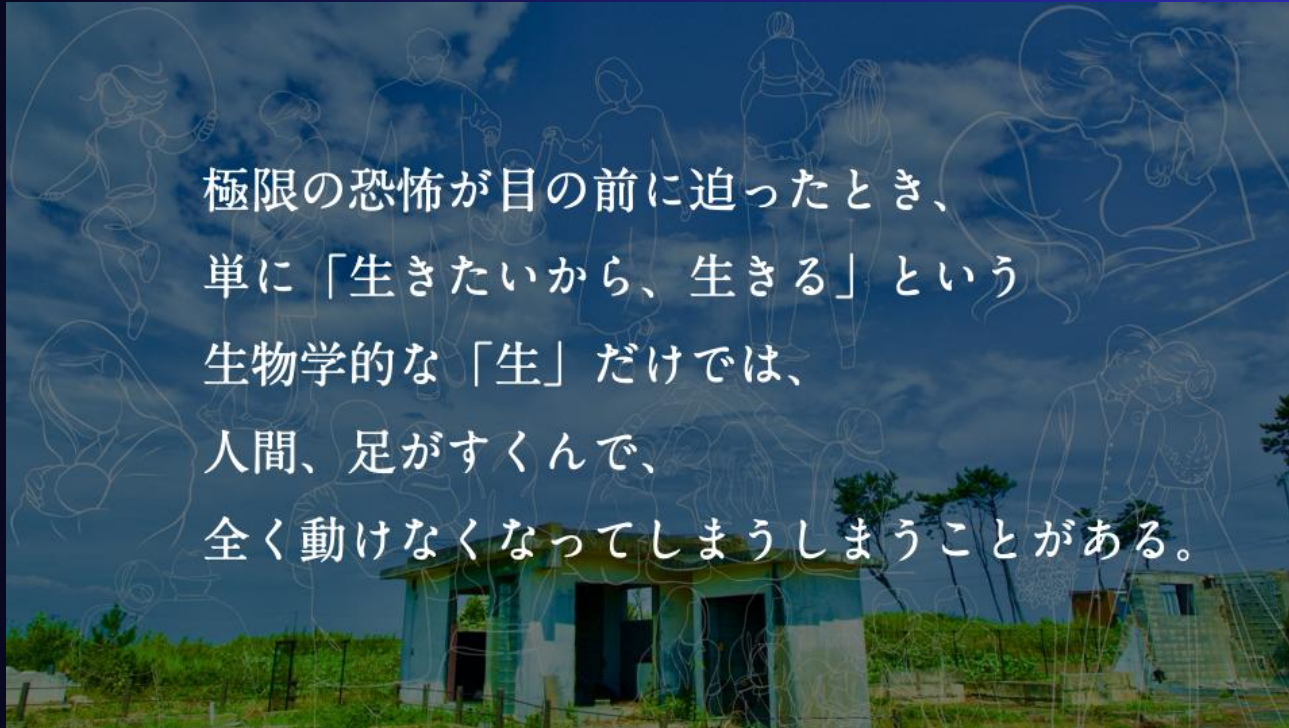


STEP 3

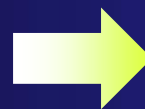
何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

④ 何のために、助からなくてはならないのか ——。



未来を描けない



しなやかに歩み続ける



STEP 3

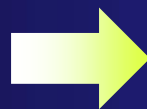
何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

④ 何のために、助からなくてはならないのか ——。



「死にたくない」



強い生きる「目的」



STEP 3

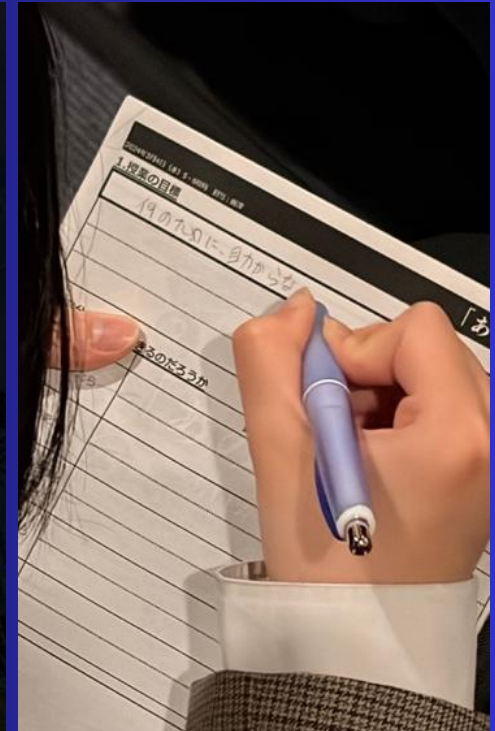
何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

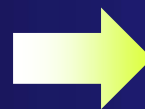
④ 何のために、助からなくてはならないのか ——。

授業の目標

何のために、助からなくてはならないのか。



生存のテクニック



強い生きる「目的」

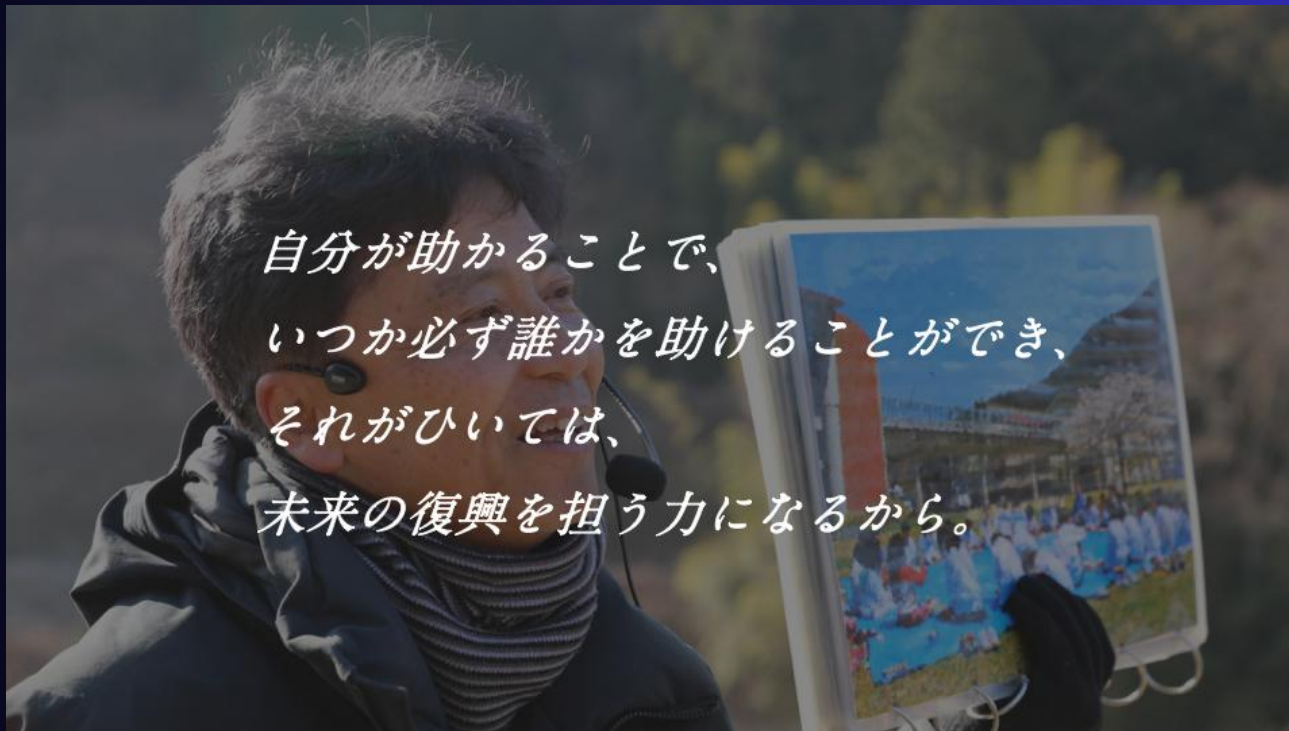


STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ

④ 何のために、助からなくてはならないのか ——。



みんな何があっても、生きて。絶対に、死なないで——。



STEP 3

何のために、
助からなくてはならないのか ——。

03 授業を構築する3つのステップ



03 授業を構築する3つのステップ

◆生徒のリフレクション

授業を受けて (感想・考えたことなど)

1年

今日の授業を受けて、「何のために、助かなくてはいけないのか。」ということを深く考えさせられました。被災者の方々のお話や、藤澤先生のスライドを見るまでは「生き残るから。」という生物学的な欲求しか思いつきませんでした。しかし、目前で津波にあふれた友人を目の当たりにした人や、自分よりも幼い小学生が何十人、何百人と命を落しているということを知り、教科書上で〇〇人死亡という文字では伝わってなかった、当時の災害の悲惨さが伝わってきました。その災害のつらさを知って最初「生き残るから生きる、たどり着くのが最終的に自宅に帰る家族がいて、学校に行ける。友人在る。自分は震災前の日常を失ってからは、自分が助かるとその先で誰かを助けたから。」という生存の先にある、強い生きる「目的」を持つことかたててきました。これから先の人生で、大災害が起きた時、どんなに逆光でも人の授業で見つけた「生きる目的」を信じて、あきらめずに強く生き残りたいと思いました。この貴重な体験をこれから的人生でいかしていきたいと思います。

本当にありがとうございました。

03 授業を構築する3つのステップ

◆生徒のリフレクション

授業を受けて（感想・考えたことなど）

1年

今まで、東日本大震災などの大きな地震や津波は教科書や短い映像でしか学んだこと
がなかったので、正直津波もそれほどあつないのかなと思っていたし、地震の大変さが分か
らなかったです。でも、授業を受けたり実際に東日本大震災にまきこまれてしまった人の言葉
を見て、今まで以上に津波のスピードや高さかどれだけ怖いのか、地震の振れはどれだけすご
いのかを知ることができました。また、今まで亡くなってしまった人達とは関係がそれほどなく、
心理的な面ではあまり考えたことがなかったけれど、今は友人や家族、身近な人をうしなう
つらさやあたりまえの日々があることの幸せさをとても実感できるようになりました。
そのため、私は今日の授業で学んだこと、考えたことを色々な人に伝えて、みんながあた
りまえの日々をずっとすごせるようにします。もし、災害が起きてもぜったい死にません。

03 授業を構築する3つのステップ

◆生徒のリフレクション

授業を受けて (感想・考えたことなど)

1年

遺族の方から家族・友人を失った自を思ひ出して、おぼろげに私たちに「自分と同じ
思ひを他の人にさせたくない」と話をしてくれた願ひをここで終らせず、教科
書では伝えない、伝えられないことを受けとらなければならぬと感じました。

また、「風化することで心は守られる」は、もう戻らない命を思ひ出したくない気持ち
があるからだと思います。自然災害は抗うことのできないことだから、誰かが悪いというわけ
ではないです。でも、大切な人を守れなかったと、自分を責めてしまったり悲しみ
のなかにいると心は壊れてしまいます。なので風化は心を守ることに役立つな
かっているのだと思います。そんな中、顔も知らない私たちのためにあの日に何か
おきたのか語ってくれる人はとても尊敬します。

「風化することで命は守られない」は恐怖や教訓を忘れて本来なら矢うことのない
命が失われることです。私は今でも災害が起こっても生きられると思っている節が
あります。でもそれは死ぬのが怖いのから生き残るのが怖い、もちろん生き残りたいけど、死ぬ
のが怖いという気持ちもかなりあると思います。

遺構を見ると、ここには私達と同じように人がいて同じ夢があって明日の
心配なんですよね。帰ったからまた家に帰る子がいなかったなんてという現実を
突きつけてきました。これを残したくないという人の意見も分かるし、後世のために
残したくない人、どちらも理解できます。それでも、残されているという事は
もうこんな悲劇はこれで終りにしたいという気持ちのおかげだと思います。
復興というもののイメージが関東に比べると強いけど、命は戻りません。今の当分前は
いつ崩れてもおかしくないのだから、しっかり大切な人との時間を大事にしてほしいです。

Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 **授業教材のご紹介**
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



04 授業教材のご紹介

#	項目	閲覧用QR	説明
01	本授業のスライド (PDF版)		本授業で使用したスライドをPDFで閲覧することができます。
02	本授業のワークシート (1回目～3回目)		本授業と、それ以前の全3回の授業で使用したワークシートをPDFで閲覧することができます。
03	学習指導案(単元指導計画)		本日の授業の概要についての資料です。
04	【アンケート調査最終結果】 「あの日」と、「明日」のあいだ。 1. 11月14日午後、605人の大人が語る(本編)と、		震災から15年が経過し、605人の大人が語った「本当のこと」をまとめたアンケート調査の結果資料です。5つの価値観が時の経過とともにどう変化したかを登えてみてください。
05	東日本大震災とは		「東日本大震災」についての概要資料になります(宮城県が作成)。当時の被災地の様子が文章と写真により大変わかりやすく編集された資料となっています。
06	いつかまた、 満開の桜を見上げた時は、 (元東京電力社員への取材記)		当時、福島第一原子力発電所に関わっていた東京電力の社員と、そのご家族の方に取材を行った記録になります。東日本大震災で、福島第一原発に関わった当事者にしか語ることのできない、大変貴重な資料です。
07	気仙沼市立階上中学校 答辞		被災した年、気仙沼市立階上中学校(宮城県)の卒業式で親原裕太さんが読み上げた答辞です。卒業生のうち1人は死亡、2人は行方不明となった中で卒業式は行われました。わずか15歳前後の少年が歯を食いしばりながら最後まで立派に読み上げた答辞の言葉は、当時まだこの震災をどう受け止めたら良いのか分からなかった大人にも、力強いメッセージとなって語りかけてくれました。彼が発する言葉のひと言ひと言に大きな重みを感じます。
08	「東日本大震災」被災地視察報告		2026年2月19日から4日間にわたり、岩手県と宮城県の被災地各所を視察しました。その際の報告書になります。各地の震災遺構を巡り、語り部の方々の声に耳を傾ける中で、震災当時の真実と復興の歩みを多角的に捉えることができました。本授業の核心となる「何のために、助からなくてはならないのか。」という問いは、この視察を経て設定されたものです。
09	「東日本大震災」被災地視察写真		2026年2月19日から4日間にわたり、岩手県と宮城県の被災地各所を視察しました。その際に各地で撮影した写真になります。



<https://sites.google.com/view/shakaichiban>

ホーム> 学習者の方はこちら> 特別授業> 「あの日」と、「明日」のあいだ。



↓ Download

全ての授業教材の閲覧・ダウンロードが可能です。

Agenda

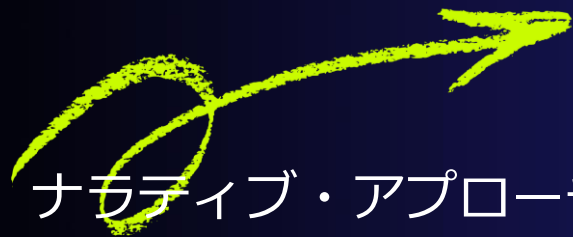
- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



ナラティブ・アプローチ

05 学術の視座から

学術の視座1：ナラティブ・アプローチ



ナラティブ・アプローチが、震災未経験世代に対して**どのような変容をもたらす効果があったのか**を考察したい。

05 学術の視座から

学術の視座1：ナラティブ・アプローチ

■ 関心をもった回答番号（関心をもった回答番号を書き出しましょう。）

48	112.	175	205.	231
255	307.	314.	477	510.

■ 1つに絞る : 48番

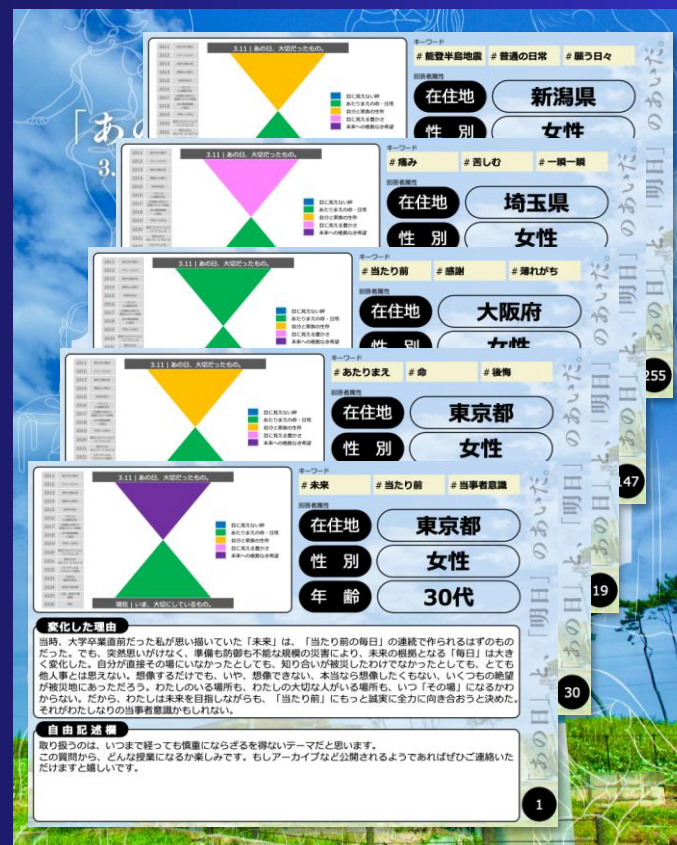
なぜ自分はその一枚に共感したのか、あるいは関心をもったのか（記述の熱量、自分との共通点、あるいは違和感など）を分析する。

私は“あの日”まだ生まれてません。13年の人生の中でも大きな震災を受けたこともない幸せ者です。それは、目の前で“友人をなくしたわたし”が奇蹟と書いてもらって実感を得ました。“友人の分まで生きる”という綺麗事は私もしようなら言えないと思う。あの日から約15年、復興はしてきているけど心の傷は癒えないと思う。一生その重みは消えないと思う。それでもかみはって生きてる人を尊敬します。

学術の視座 1 : ナラティブ・アプローチ



A photograph of a multi-story building under construction or renovation. The structure features concrete pillars and beams, with exposed rebar and scaffolding visible. A large window with a grid pattern is prominent on the upper floor. The ground level shows a partially completed interior space with a metal gate and various construction materials.



「本当の誰かの人生」 として認識

05 学術の視座から

学術の視座1：ナラティブ・アプローチ



未経験世代の「震災」の捉え方を変える

1 従来の「防災教育」の限界と課題

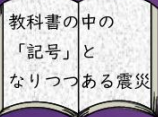
凄惨な震災の様子を知る



他人事化

強烈なストレス

記憶の風化（15年）



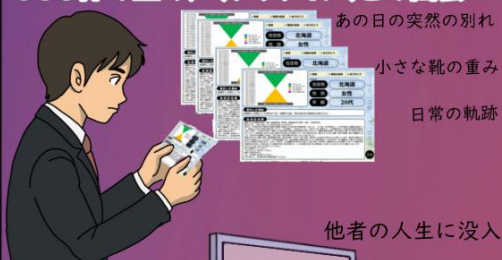
心のシャッターが降りる

恐怖をエンジンとした

受動的な授業の限界

2 「恐怖」から「生きる意志」への転換

605件の生の声(ナラティブ)との出会い



他者の人生に没入

客観的な事実

↓
自分自身の物語

未来をひらく、生きる意志

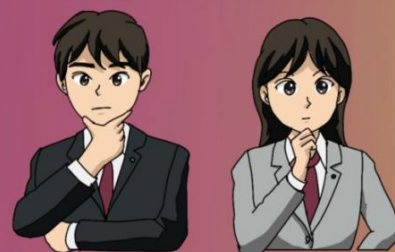


命を「明日」へ繋ぐ願い

3 人間教育としての「希望の防災」へ

何のために助からなくてはならないのか

本質的な問いへ向き合う時間



助かることを権利としてだけでなく、
ともに未来を創り出す力へ



災害を生き抜き未来をひらく

「人間教育」の原点

▲ナラティブ・アプローチによる「希望の防災」授業の全体構造

他人事としての歴史



自分自身の人生

05 学術の視座から

学術の視座1：ナラティブ・アプローチ

Point!!

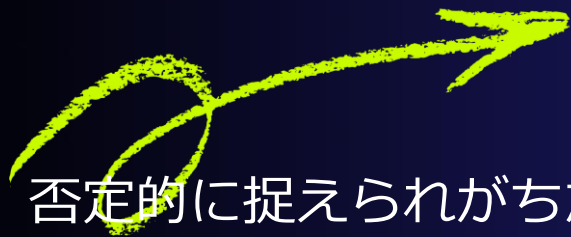
生徒たちは、**物語（ナラティブ）**を道しるべとすることで、時間の壁を乗り越え、震災の教訓を義務やルールとしてではなく、自らの内側から湧き上がる**「生き抜くための意志」**として**体得**した。

一人ひとりの具体的な物語から、時代を超える普遍的な意志を導き出す回路を築くこと。それこそが、風化という時の流れに抗い、震災の教訓を未来へと繋ぎ止めるための方法になるのではないか。

砂時計モデルによる 「風化」の止揚

05 学術の視座から

学術の視座2：砂時計モデルによる「風化」の止揚



否定的に捉えられがちだった「風化」という現象が、砂時計モデルを用いた学習活動を経て、**その認識にどのような変化があったのか**を、**「身体を通じた理解」**という観点から考察したい。

05 学術の視座から

学術の視座2：砂時計モデルによる「風化」の止揚



行った学習活動

1本の糸を「震災後の15年を生きる1人の人生」に見立てて、砂時計のくびれ部分を潜り抜けさせる活動。

ねらい

物理的な手作業を通じて、抽象的な「風化」という概念を、リアルに実感してもらうことをねらいとした。

05 学術の視座から

学術の視座2：砂時計モデルによる「風化」の止揚



行った学習活動

1本の糸を「震災後の15年を生きる1人の人生」に見立てて、砂時計のくびれ部分を潜り抜けさせる活動。

ねらい

物理的な手作業を通じて、抽象的な「風化」という概念を、リアルに実感してもらうことをねらいとした。

ポンティ（1945）



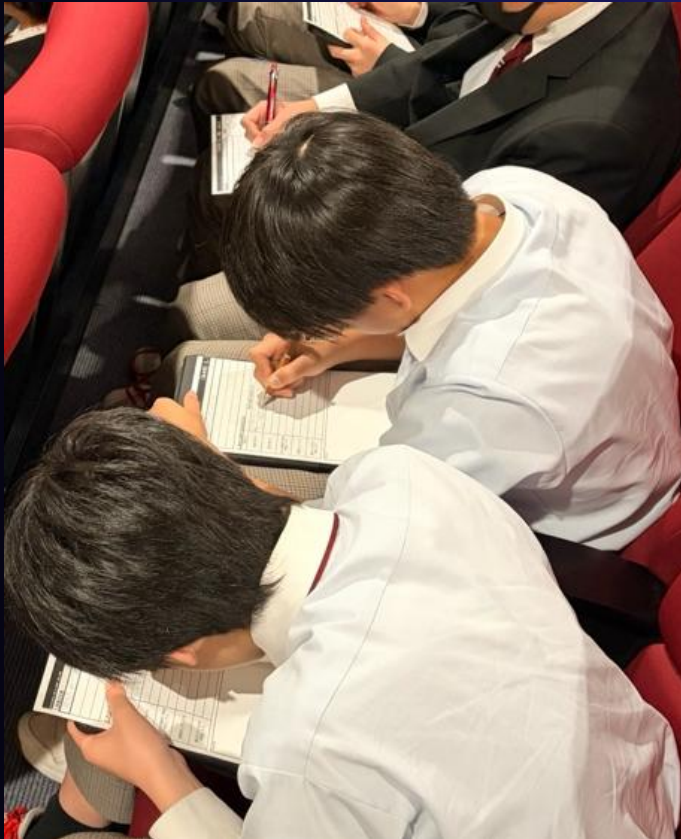
人間が世界を認識する際、意識が対象を一方的に分析するのではなく、身体が世界の中に投げ込まれ、世界と直接的に関わることを通じて理解が成立する。

05 学術の視座から

学術の視座2：砂時計モデルによる「風化」の止揚



「風化」を実感を伴って理解する



頭で表面的に理解する



身体で直感的に捉える

05 学術の視座から

学術の視座2：砂時計モデルによる「風化」の止揚

Point!!

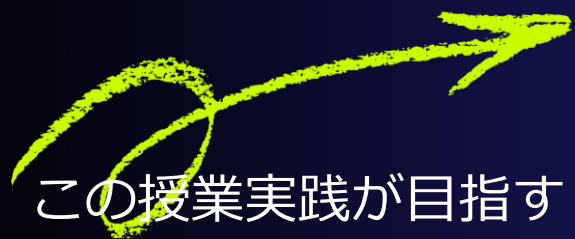
「糸を通すのは想像以上に難しかったけれど、手元のもどかしさや難しさがあったからこそ、この15年間という時間の重みや、記憶が薄れていく経過について深く考えさせられた」（生徒の感想）

指先で糸の「摩擦」を感じたからこそ、一本の糸を丁寧に結び合わせた瞬間に得られる気付きは、**単なる「教科書的な正解」にとどまらず、生徒一人ひとりにとって血の通った実感を伴うものになっていった**のではないだろうか。

キャリア教育としての 「希望の防災」教育

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育



この授業実践が目指す「**希望の防災**」は、従来の「死なないための技術や知識の習得」を超えた「**人間教育**」の**営み**である。不条理な震災を前に、いかに自らの生に意味を見出し他者と歩むかという「**災害に向き合う生き方の教育**」として**捉え直す**ことで、教育学における「**キャリア教育**」の視座と深く重なり合う。

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育

三村隆男（2008）



キャリア教育を特定の時間だけで行うものではなく、学校教育のあらゆる場面において「キャリア教育の視点」を持って教育活動を展開することが重要。

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育



社会科 × 国語科 × 理科

三村隆男（2008）



キャリア教育を特定の時間だけで行うものではなく、学校教育のあらゆる場面において「キャリア教育の視点」を持って教育活動を展開することが重要。

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育



キャリア教育

社会科 × 国語科 × 理科

三村隆男（2008）



キャリア教育を特定の時間だけで行うものではなく、学校教育のあらゆる場面において「キャリア教育の視点」を持って教育活動を展開することが重要。

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育



キャリア教育



生きる指針

社会科 × 国語科 × 理科

三村隆男（2008）



キャリア教育を特定の時間だけで行うものではなく、学校教育のあらゆる場面において「キャリア教育の視点」を持って教育活動を展開することが重要。

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育

1.授業の目標

何のために助かる必要はないのか。

生きて言葉の力を立つために、自分と誰かが生きる未来のために、そのために死を覚悟する必要はないから生きねばならない。

1.授業の目標

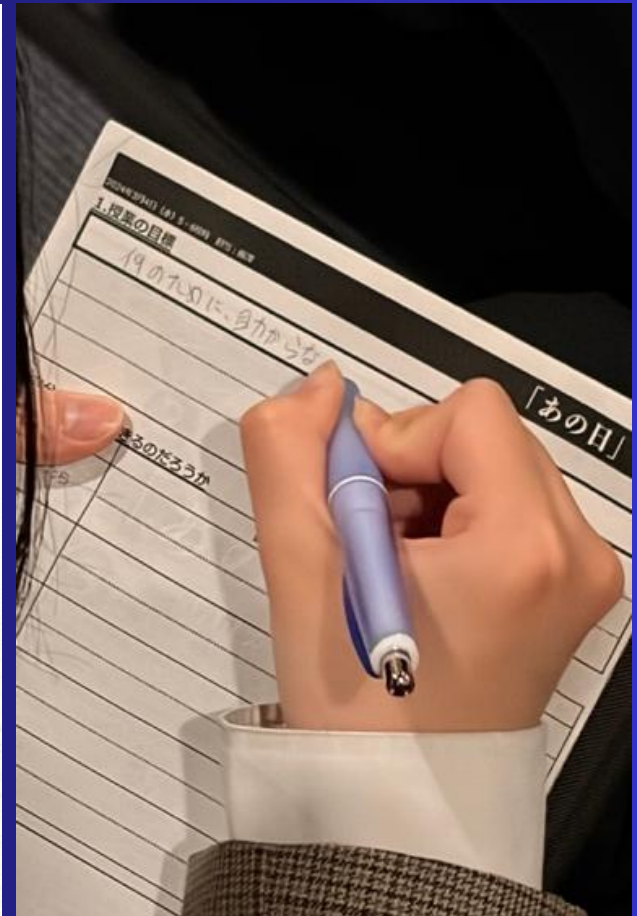
何のために、助かるなくてはならないのか。

自分が生きて、やりたいことや目的などを達成できるようにするため。また自分が生きれば他の人を助けたり、当時のことを伝えたりすることもあるため。

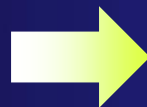
1.授業の目標

何のために助かるなくてはならないのか？

東日本大震災で味わった「恐怖」「苦しみ」「悲しみ」を次の人に伝えるため。犠牲になってしまった人たちの思いをせおい明日もその次の日常を過ごすため。助かることで誰かを助ける。



「自分が助かる」



他者とのつながり

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育

「ゲームができなくなってしまうから」

「大好きなプリンが食べられなくなってしまう」

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育

「ゲームができなくなってしまうから」

「大好きなプリンが食べられなくなってしまう」

等身大の欲求や素直な生命肯定の土台

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育

他者や社会のために生きる

「ゲームができなくなってしまうから」

「大好きなプリンが食べられなくなってしまう」

等身大の欲求や素直な生命肯定の土台

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育

1.授業の目標

何のために助からなくてはならないのか。

生きて誰かの役に立つために、自分と誰かが生きる未来のため、そのために

死を避ける必要がないから生きなくてはならない。

1.授業の目標

何のために、助からなくてはならないのか。

自分が生きて、やりたいことや目的などを達成できるようにするため。また

自分が生きれば他の人を助けたり、当時のことを伝えたりすることでも
きるため。

1.授業の目標

何のために助からなくてはならないのか？

東日本大震災で味わった「恐怖」「苦しみ」「悲しみ」を次の人に伝える
ため。犠牲になってしまった人たちの思いをせおい明日もその次の

日常を過ごすため。助かることで誰かを助ける

05 学術の視座から

学術の視座3：キャリア教育としての「希望の防災」教育

∴ **Point!!**

キャリア教育のなかで重視される「関係性の中での自己形成（他者や社会との関わりを通じて自分自身を作り上げていくこと）」が、生徒自身の**内発的な気付き**として形になった。

生徒たちが自らの生き方を、さらに広い視野で見つめ直すような、
「未来を思い描くキャリア教育」としての役割を、今回の授業は果たせたのではないだろうか。

Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



“——

恐怖を起点とした防災教育から、
希望を起点とした、人間教育へ。

06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ



指導参考資料集

実践的な 防災教育の手引き

令和6年3月

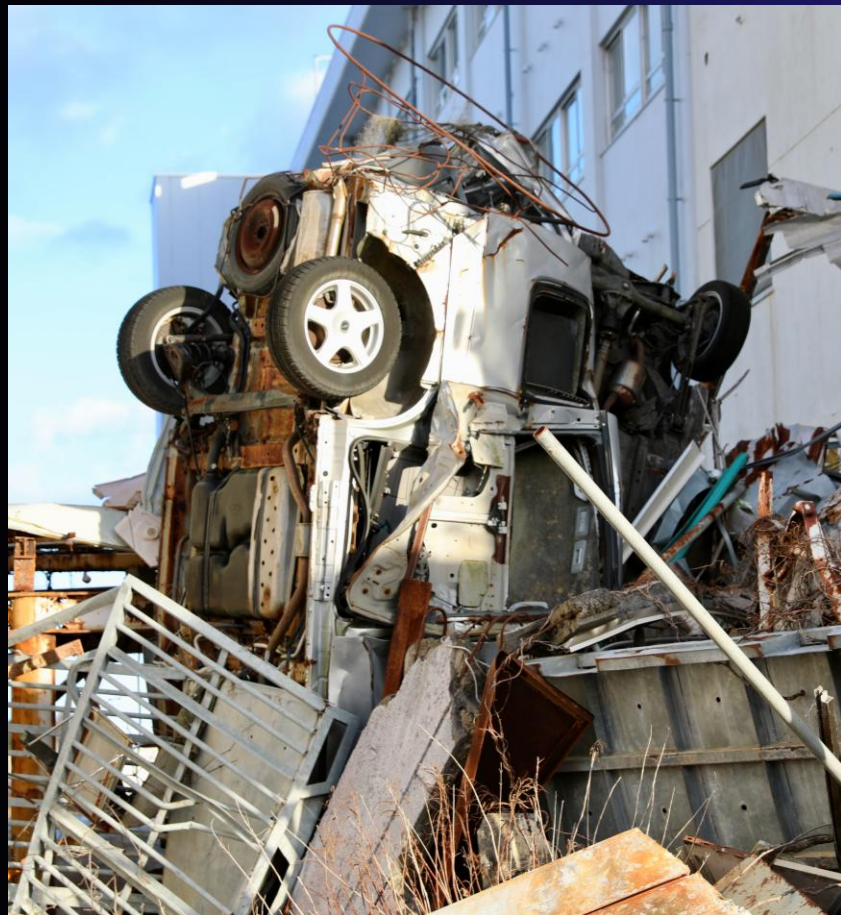
中学校・高等学校編

 文部科学省
MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

「恐怖」を起点にした教育は、
時間が経つにつれて本質的な限界を迎えることになる。

06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ

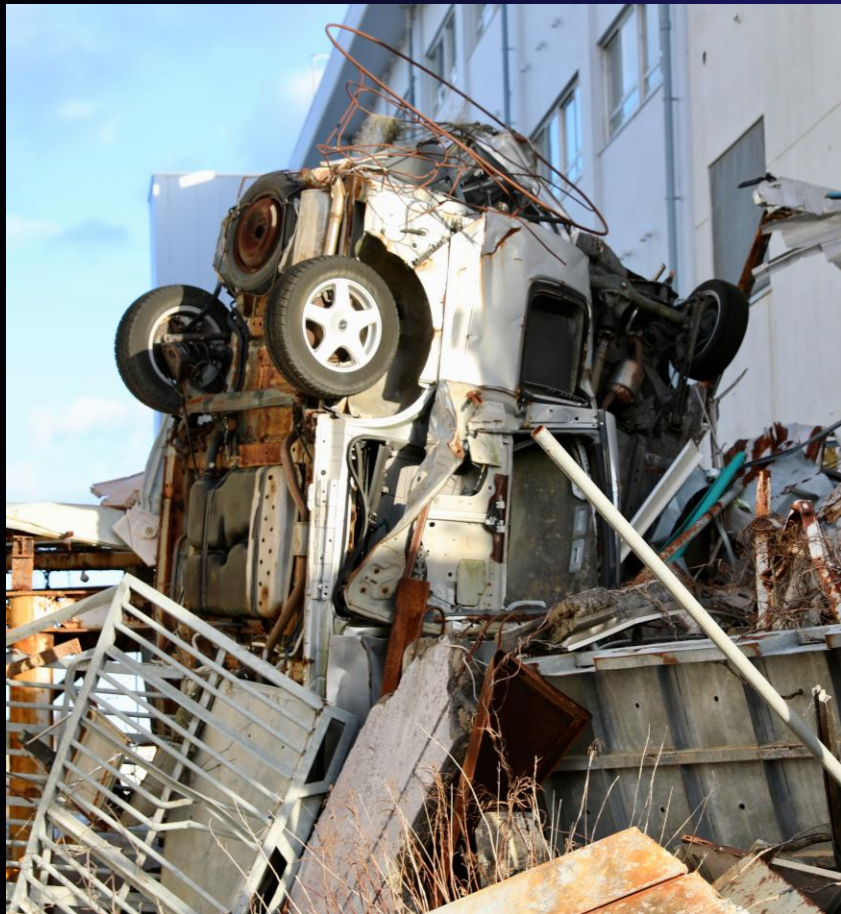


東日本大震災

= 「記号化された歴史」の一部

06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ



東日本大震災

= 「記号化された歴史」の一部

私たちが真摯に向き合わねばならない課題

06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ

「あの日」と、「明日」のあいだ。

何のために、

助からなくてはならないのか——。



06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ

「あの日」と、「明日」のあいだ。

何のために、
助からなくてはならないのか——。

「他者や社会と共に生きる姿勢」へ繋げる。



06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ

「教育とは何か」

06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ

「教育とは何か」

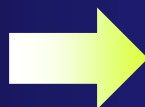
「希望」によって
子どもたちの中にある
内なる生きる意志を解き放つこと

06 提言

防災を「人間教育の根幹」へ



防災教育



人間教育の根幹

「この世界は、生きるに値する場所である」

「生き抜く理由」

小さくとも確かな**希望**である。

“——

恐怖を起点とした防災教育から、
希望を起点とした、人間教育へ。

Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



本稿を締めくくるにあたり、多大なるご助力をいただいた皆様に、深甚なる感謝の意を表します。

まず、厳冬の視察において、被災地の「生と死」の境界線を共に歩み、導いてくださった語り部と伝承の専門家の皆様に厚く御礼申し上げます。震災語り部伝承連携組織・公益社団法人「3・11メモリアルネットワーク」および東北大学災害科学国際研究所研究員 武田真一氏、ならびに同組織の 阿部任氏。お二人の深遠な知見と、命に対する峻烈な眼差しがなければ、本実践の骨格は成り立ちませんでした。武田様から私に投げかけられた「何のために助かるのか」という問いは、私の教育実践における揺るぎない指針となりました。

現地の息遣いを伝えてくださった、杉ノ下地区遺族会の 小野寺敬子氏、いのちをつなぐ未来館の 川崎杏樹氏、戸倉小学校元校長の 麻生川敦氏、大川伝承の会・語り部の 佐藤敏郎氏、石巻市門脇小学校元校長の 鈴木洋子氏、石巻西高校元校長の 斎藤幸男氏、そして仙台市荒浜小学校元校長の 川村孝男氏。皆様が託してくださった「本当のこと」の重みを、私は生涯、教壇から繋ぎ続けます。荒浜小学校の屋上で見上げた空、向洋高校の壁に残る傷跡、そして静寂の中に佇む大川小学校の校舎——。それら一つひとつが、305名の生徒たちの心を震わせ、生涯忘れることのない、生きるための道標となりました。

また、私の以前の勤務校での教え子のご両親であり、ご自身の歩みを静かに打ち明け、取材に深く協力してくださった、あるご夫妻。それまで周囲に「語れなかった」言葉にならないほどの切実な思いと記憶、そして「どんな境地にいても幸せは見つけられる」という言葉は、この「希望の防災」を形作るための、決定的な心の拠り所となりました。

そして、私の教育実践の礎を築いてくださった恩師、早稲田大学名誉教授であり国立教育政策研究所フェローの三村隆男氏に、心からの敬意と感謝を捧げます。震災から10年目の節目であった2021年から、同氏には幾度となく私の授業を見学していただき、多大なるご指導を賜りました。三村氏が示してくださった、教育が社会に対して果たすべき役割という視座が、本実践を単なる「知識の伝達」から「命を巡る哲学」へと深めるための原動力となりました。

アンケート調査にご協力いただいた世界22カ国、605名の皆様。皆様がナラティブを通じて届けてくださった言葉は、305名の魂を揺さぶる羅針盤となりました。特に、開智所沢中等教育学校(現勤務校)第一学年の保護者の皆様におかれましては、調査への協力のみならず、授業後の温かな反響を通じて、本実践の意義を家庭という場において完成させてくださいました。

皆様の支えがなければ、この授業は完結し得ませんでした。

そして、本稿の中核をなす「砂時計モデル」のデザイン、および描画を担当してくれた、本校生徒の遊佐ひなたさん。私が提唱した「風化を価値の濾過プロセスとして捉え直す」という抽象的な教育概念を、彼女は類まれなる感性と深い思索で受け止めてくれました。彼女が祈りを込めて描き出した奇跡の一本松と夕焼けの色彩は、単なるイラストレーションの域を超えています。それ自体が、「震災を知らない世代が、自らの手で記憶に新たな命を吹き込む」という、極めて尊い実践の結実でした。彼女のようなひたむきな感性に出会い、一つの表現を共に深めることができたことは、教育者としてこの上ない幸福であり、彼女が描いた希望の光の色は、本稿の主張に強い説得力を与えてくれました。遊佐ひなたさんの真摯な表現に、最大限の敬意と感謝を捧げます。

そして、言葉に尽くせぬ感謝を、最愛の妻と娘へ。日々の授業研究や現地視察によって家を空けることも多かった私を、常に温かく支え、教壇へ送り出し続けてくれた妻。あなたの元教員としての深い理解と、家庭に灯してくれる変わらないあたたかさがあったからこそ、私は迷うことなく前を向き、「希望の防災」という新たな地平をどこまでも深く追い求めることができました。そして、ただそこにいて愛らしい笑顔をくれるだけで、一人の親としての喜びを思い出させ、私が語る「命」の重さをその存在すべてで支えてくれる、大切な娘。二人の存在こそが、私が「希望の防災」を語るうえでの、最も原初で、最も強力な原動力でした。ここに最大の愛と感謝の意を表します。

さらに、こうした教室内の取り組みを広く社会へ発信してくださった教育新聞社、読売新聞東京本社、テレビ埼玉の報道関係者の皆様に感謝いたします。皆様が「未経験世代による生の再構築」という視座を提示してくださったおかげで、305名が一堂に会したあのホールでの実践が、一過性の行事に留まらず、より大きな未来への提言として形を成すことができました。

最後になりましたが、本実践の場を整えてくださった本校校長、ならびに日々の教育活動を陰ながら支え、温かく見守ってくださった教職員の皆様。学年を挙げた特別授業の実施にあたり、私の視察や準備に伴う不在時も含め、教育活動が滞りなく進むよう多大なるご配慮をいただいたことに、深く感謝申し上げます。皆様の理解とバックアップがあったからこそ、この挑戦的な試みを最後まで完結させることができました。

07 謝辞

そして——。

共にあの100分間を生き、
自らの手で「未来を拓く」当事者となった、305名の教え子たちへ。

君たちが向けた真摯な眼差し、溢れさせた涙、
そして「絶対に死なない」と綴った筆先の力強さこそが、
私にとっての救いであり、希望でした。

君たちが紡ぎ出す「明日」を、
私はこれからも一番近くで見守り続けていきます。

君たちの「生きる」姿そのものが、
あの日失われた数多の「明日」を照らす、
もっとも誠実な光になると信じて。

あなたもまた、この希望を未来へ繋ぐ、一人の当事者なのだから。

2026年8月

開智所沢中等教育学校
社会科教諭 藤澤 和駿

Agenda

- 01 問題意識
- 02 この「問い」に向き合う理由
- 03 授業を構築する3つのステップ
- 04 授業教材のご紹介
- 05 学術の視座から
- 06 提言
- 07 謝辞
- 08 参考文献



08 参考文献

- Bruner, J. (1986). Actual Minds, Possible Worlds. Harvard University Press. (ジェローム・ブルーナー 著, 田中一彦 訳 (1998). 『実際の心、可能な世界』 みすず書房.).
- 藤澤和駿 (2026). キャリア形成を促進するWBL型防災探究学習の意義：危機管理意識の精緻化が拓く、未来の社会形成者としての自覚. 早稲田キャリア教育研究, 17, 32-33.
- 藤澤和駿. (2026). 3.11から15年、600人の大人が語る「本当のこと」. . 開智所沢中等教育学校. (未刊行学内資料).
- 藤澤和駿. (2026). 授業スライド.pdf. 開智所沢中等教育学校. (未刊行学内資料).
- Green, M. C., & Brock, T. C. (2000). The role of transportation in the persuasiveness of public narratives. Journal of Personality and Social Psychology, 79(5), 701-721.
- Hansen, L. S. (1996). Integrative life planning: Critical tasks for career development and changing life patterns.
- Jossey-Bass. (L. S. ハンセン 著, 篠田真貴子・立野了嗣 訳 (1999). 統合的ライフプランニング—変化する世の中でのキャリア・デベロップメントとライフ・パターン, ダイヤモンド社.
- ハンセン, L. S. (2000). 『統合的ライフプランニング：変わりゆくライフ・パターンとキャリア開発のための重要課題』(桂ゆき, 小池美砂子, 渡辺三枝子 訳). 創元社. (原著発行年 1997年).
- 片田敏孝. (2012). 人が死なない防災, 集英社.
- 教育新聞. (2026年3月10日). 教員自ら取材、圧倒的リアリティー 非体験世代が向き合う東日本大震災.
- Krumboltz, J. D. (2009). Luck is no accident: Making the most of happenstance in your life and career (2nd ed.). Impact Publishers.
- レイコフ, G., & ジョンソン, M. (1986). レトリックと人生, (池上嘉彦 訳). 大修館書店. (原著 : Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). Metaphors we live by. University of Chicago Press.)
- Merleau-Ponty, M. (1945). Phénoménologie de la perception. Gallimard.
- 三村隆男. (2014). キャリア教育の理論と実践. 勁草書房.
- 文部科学省 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について, 中央教育審議会答申.
- 文部科学省. (2011). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書.
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領解説 社会編. 東洋館出版社.
- 文部科学省. (2024). 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育(改訂版).
- 文部科学省. (2022). 第3次学校安全の推進に関する計画.
- 文部科学省. (2018). 高等学校学習指導要領解説 地理歴史編. 教育出版.
- 文部科学省(2019)「生きる力」をはぐくむ 学校での安全管理(改訂版).
- 文部科学省. (2019). 学校防災マニュアル(地震・津波災害)作成の手引き.
- Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. Journal of Vocational Behavior, 16(3).
- スーパー, D. E. (1994). ライフ・スパン、ライフ・スペースのアプローチ(渡辺三枝子 訳). D. ブラウン, L. ブルックス(編)キャリア・カウンセリングの理論：21世紀に向けて, pp. 161-224. ブレーン出版. (原著発行年 1990年/1980年).
- 竹内裕一ほか. (2025). 中学社会 地理 地域にまなぶ, 教育出版株式会社.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2004). Posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence. Psychological Inquiry, 15(1), 1-18.
- テレビ埼玉. (2026年3月11日). 東日本大震災から15年 生徒が震災学習 [テレビ番組] .
- UNESCO. (2014). Stay safe and be prepared: A student's guide to disaster risk reduction. UNESCO Publishing.
- UNISDR. (2015). Sendai framework for disaster risk reduction 2015-2030. United Nations Office for Disaster Risk Reduction.
- 矢守克也(2005)防災・減災の社会心理学：生き残るための知恵と力.
- 矢守克也. (2013). 巨大災害のナラティブ：防災教育の新しい地平, 幾久出版社.
- 読売新聞. (2026年3月11日). 震災後生まれ 1年生授業 体験者の「声」触れる. 『読売新聞』朝刊.

災害に向き合う教育としての

希望の防災



資料のご提供

本日の発表資料



PDFで参照できます

社会知盤 (web)



各種教材をダウンロードできます

ダウンロード
が可能です!!



実践事例「あの日」と、「明日」のあいだ。 授業資料



PDFで参照できます

映像「あの日」と、「明日」のあいだ。 授業映像 (100分間フル)



映像を視聴できます (フル)



ありがとうございました。

KAZUTAKA FUJISAWA

